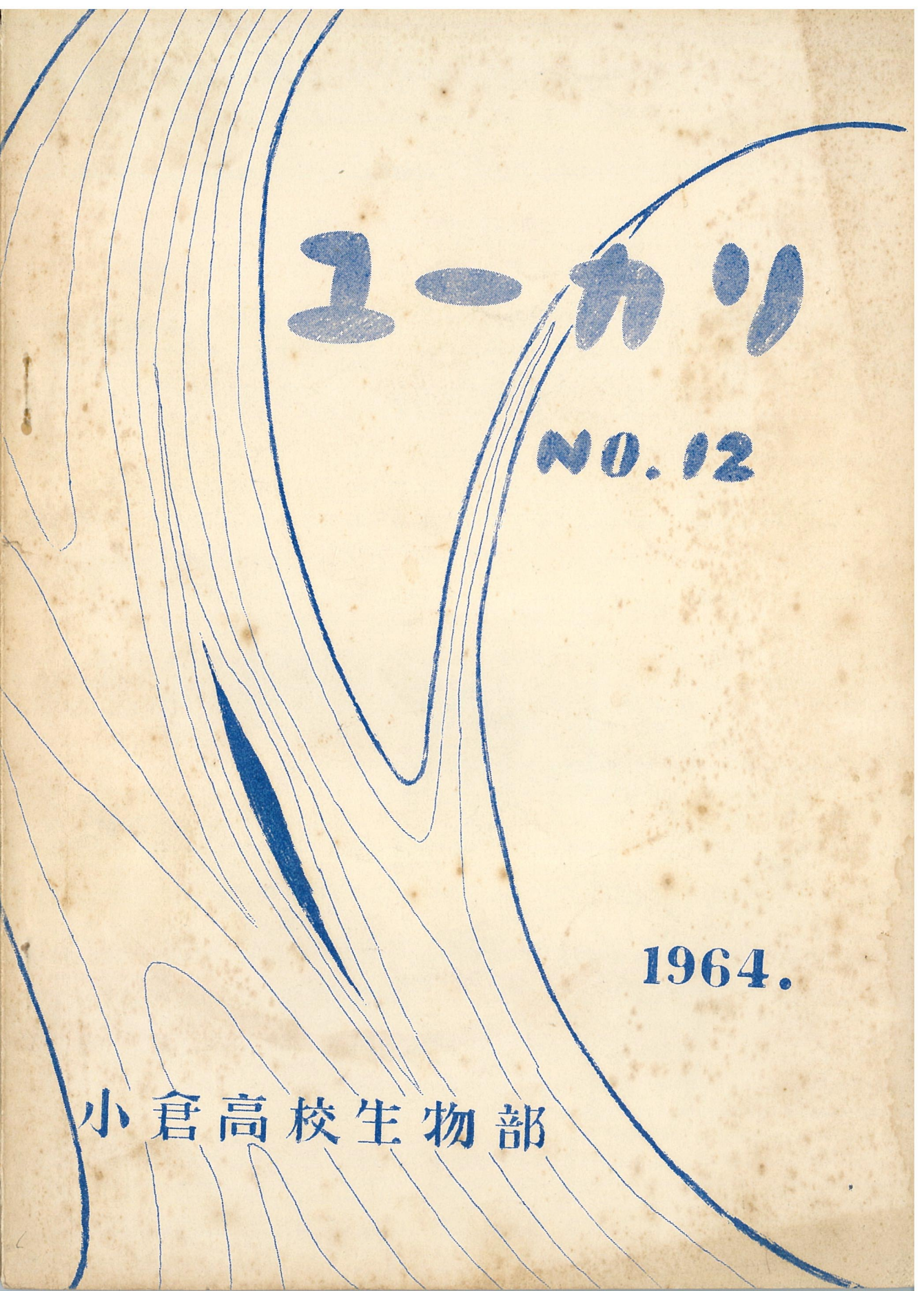




1-カリ

NO. 12

1964.

小倉高校生物部

11-11-1

21.04

1-301

11-11-1

序

2年 岡本 研作

この頃感じることなのであるが、どうも以前ほど簡単に蝶を捕えて三角紙へという気がしないのである。目の前のヤブカラシの花にアゲハチョウが止っているのを見ても、かわいいなあ、美しいなあ、あゝもうこんな季節になったのかなあ、と飛び立つまで眺めているだけである。あの一心に蜜を吸っている姿は何にもかえがたく尊い姿に思われる。

だが、私たちの研究の爲には彼女は身を犠牲にしなければならぬ時もある。そんな時、僕はひそかに思う。“僕の生物に対して持っている気持は、果して愛情なのであろうか。”



“ユ－カリ” No. 12 目 次

● 序	2年 岡 本 研 作	1
● 昭和38年度 1年の歩み		3
▶ 藍島長期採集旅行 ◀		
○ 藍島の思い出	1年 川 村 尚 也	6
○ 藍島に於けるプランクトンの研究と感想	2年 興 島 寛 治	8
○ 植物班藍島採集旅行記	2年 吉 生 正 人	19
○ 藍島植物採集目録		24
○ 藍島の昆虫	2年 田中丸 魁 雄	30
○ 藍島昆虫目録		35
○ 藍島の海藻	1年 其 木 茂 則	39
▶ 自 由 研 究 ◀		
○ 帰化植物	2年 興 松 安 六	42
○ 薬用植物	1年 足 立 雅 子	48
○ 有毒植物	2年 吉 生 正 人	51
○ 鶏の発生	1年 田 原 洋 一	53
○ 障子台の昆虫	2年 品 川 一 郎	58
○ アイスクリーム中の大腸菌	2年 岡 本 清 美 1年 筒 井 昭 代	68
○ 呼吸と温度の関係を調べる迷実験	2年 吉 生 正 人	74
▶ 文化祭の反省 ◀ (植物・プランクトン・海藻・園芸・昆虫各班)		77
▶ 自 由 投 稿 ◀		
○ 植物後記	3年 佐 藤 幹 雄	82
○ サボテンのおはなし	2年 赤 坂 裕	85
○ 僕の生物部生活	1年 河 原 春 彦	89
● 部員住所録		91
● 編集後記		92
◀ 表 紙 2年 赤 坂 裕 ・ カット 2年 興 島 寛 治 ▶		



昭和38年度 “1年間の歩み”

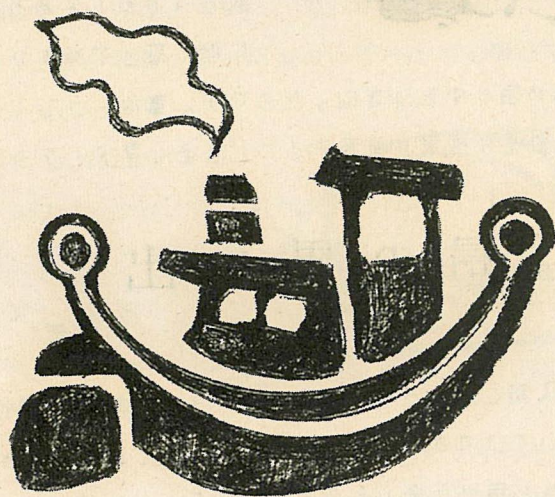
4月 28日	新入生歓迎遠足(平尾台)
29日	福智山採集
5月 3日	福智山採集
19日	障子岳採集
21日	本年度の計画・役員交代式
26日	第一回藍島調査
6月 9日	第二回藍島調査
29-30日	障子岳採集
7月 6・7日	障子岳採集
14日	第三回藍島調査
21~24日	藍島長期採集旅行
31日	長期旅行反省会
8月 2日	ユーカーリ完成
6日	ユーカーリ鑑賞会
7・8日	障子岳採集
28日	長期旅行研究発表会
29日	第四回藍島調査
9月 25日	品川君昆虫展で準特選を得る
11月 1日	和布刈採集
2-3日	文化祭
20日	文化祭反省会



12 月 22 日	三年生送別会
1 月 11 日	本年度の計画をたてる。
2 月	奥 内 実 験
3 月 11 日	福智山採集（イモリ・プラナリア）
24 日	竜王峡採集

藍

島



生物部, 研究旅行記より

藍島長期採集旅行



私たちは今年も研究をする場所として藍島を選びました。昨年度の不十分な調査を補なおうと考えたからです。7月21日から24日までの4日間、私たち三十数名は炎天下をある者は昆虫を求め、野に咲く花を求め林の中を動き回り、ある者は水中の生物を求め海の中を泳ぎ回ったのです。事故一つなく、楽しかった共同生活を味わい、こゝに研究の成果を発表することは全く喜びとするところであります。

『 藍島の思い出 』

1年 川村尚也

この旅行が目的で入部したようなわけで、夏休みの長期採集旅行を大変楽しみにしていたが、藍島と聞いていささかがっかりした。しかし出発の日が2、3日に迫りいろんな準備をしていると自然に楽しくなるもので「もしあの人が-----」などと先のことを一人で想像してニヤニヤして母に笑われたりした。

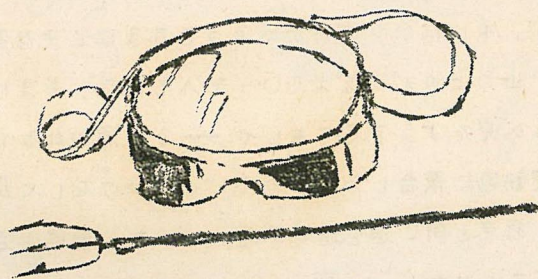
僕達の班つまりプランクトン班の今回の計画は、藍島周辺の海岸の潮流や地球の異なった場所のプランクトンの採集とそこの状況（気候・水温・風向・潮流・p.H.）などの測定とウニの受精の観察、それに磯の小動物の採集である。

7月21日3時30分に生物部員約30名を束せた船が真夏の太陽がギラギラ照りつける中をエンジンの音も呟調に小倉港を出発した。途中大小のクラゲがきもちよさそうに浮いているのを見た。約1時間後に目的地の藍島に着いた。（藍島のことについてはユーカリNo.11で先輩が説明しているので省くことにする。）島に着いての第一印象は、小さな港のまわりに田舎風の家がぎっしり集まり、その後はすぐ山になっていて何の南国の島に来たみたいな感じをうけた。この旅行の間僕達の住みかとなる菊陵中学校の分校に行く途中風化によってできためずらしい模様をした岩がみられた。

第一日目は別に採集に行かなかったが、この日の夜にこの旅行中僕の一番印象に残ったことが起った。

それは夜の十分暗くなった海岸に行って磯の水面で無数に光る夜光性プランクトンを見たことだ。むろんこれは僕にとっては初めての経験なので特に印象深かった。真暗な水面に光っている夜光虫、そしてその中で特に強くホタルに似た美しい光を放っている海ホタル。ネット（プランクトンネット）でそれを引くと刺激したためか一瞬と明るく輝き、引き上げるときに捕えそじた海ホタルが水面に落ちてその光が瞬間的に明るくパッと四方に散りながら真暗な水中に吸い込まれるようにして消えていく光景は本当に幻滅的だった。

2日目、僕たちの班はウニの採集に行った。港にほど近い岩のごつごつしているところで先輩と一緒に落ると岩の表面にある沢山のにぎりこぶし程にあいた穴に紫色の長い触手をもったムラサキウニが美しくみられた。テレビでよくある海底探険の気分で海水パンツからナイフをだしてウニをはぎとった。ウニの雌雄は僕たちには外観から区別できない。“アリストテレスのちょうちん”という口にあたる部分に解剖



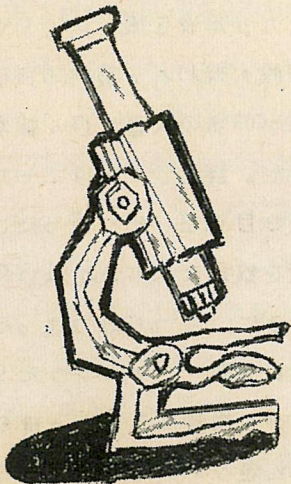
ハサミを入れて、丸く切りとり、塩化カリ溶液を流し込んでやると雌だと卵、雄だと精子を出す。僕たちがとってきたウニは大きいばかりで、そのせいが切って出てくるのは卵ばかりで望みの雄ウニはなかなかなく、ウニも雌の方が大きいのかなあと思ったりもしたが、8、9匹目にやっとでてきた。これに塩化カリ溶液を流し込んでやると生殖腺から煙のように精子がでてきた。数分たって受精膜が現われ、最初の成功を収めた。それから時々、実験室に行って顕微鏡をのぞいたが卵割の状態が良く観察できた。顕微鏡写真でその経過の記録を試みたが失敗に終わった。詳しいことはユーカリNO.11の先輩の研究した“ウニの発生と濫殺”を参考。2日目で思い出に残ったことは、眼をみて泳ぎに行ったこと、それに分校の小さな講堂で蚊帳に入りきれないで蚊に血をとられたり、いっとしていても汗が吹きでてくるように、ぎっしりつまった蚊帳の中でヒソヒソ話をしたり、先輩からためになるお話を聞かせてもらったりしたことだ。困ったことは飯の準備と後かたづけだ。30人分の用意は大変で一日の活動時間の半分を使ったようだが、これは反省の余地があると思う。大きなちゃんこ

鍋で運動場の片すみでスープをつくった。ふたを開けて味みをする度に風で吹きとばされた運動場の砂がサラサラサラとはいったり、よごれた手をつつこんだりして化学調味料による味以外に特別な味がでたのではないか——。しかし予想以外においしかった。それに飲料水は井戸水で、にぎっていて少し塩の味がしてのみづらかった。

3日目も鈍いてウエの受精の実験をした。皆遊ぶ方が得意で暇をみては、泳ぎにいたり、運動場で野球をしたりした。島の人達は半農半漁の生活で小高い山の上にも畑がつくられていた。今日が藍島に泊まる最後の日で日が遅んで暗くなった海岸でキャンプファイヤーをした。校歌や童謡歌など大声を出して歌った。海の何こうには小倉の町の灯がチラ、チラと輝くのち見ながらキャンプファイヤーの赤々と燃える中で約2時間楽しくすごした。

いよいよ最後の日。朝から荷物の整理、採集物の点検などや、世話になった学校の掃除、便所の掃除をした。便所の掃除はけっこうで、皆はじめてするのだろうとは思うが、中にはかつき方からあるき方まで上手な者がいて、急な坂道を一滴もこぼさないで山の上のどつぼまでいった人もいた。おまけに先生も汲みとりをした、冗談ではあるが見たようすではもしや——？と思われるほどだった。いよいよ帰るときになって運動場に集合したが、皆ひどく日やけをして皮がはげてまだらになっている人もいた。行きと同じ道を通って港にいった。藍島生活4日間で知り合った男の子が見送りにきてくれた。

さて、僕自身のこの夏季長期旅行の成果はというと、クラブ活動の楽しさがわかったこと、それに平泳ぎができるようになったことぐらいだった。しかし、これを良い経験として来年の夏休みの採集旅行は大いに張りきろうと思っている。



藍島に於ける

プランクトンの研究と感想

(2年間)

2年 奥島寛治

今年の夏の採集旅行は昨年よりも1日少ない3泊4日であった。おまけに我々プランクトン班にとって大きなシ

ヨックだったのは 図-1 プラクトン 藍島採集海域

船の都合がつかないことであつた。島の人達にいろいろあたってみたがダメ(もっと行く前に予約しておくべきだったと反省)そこで今年は内湾だけを徹底的にやろうと言うことで始めた。最も班の者は変化がなくて、少々、期待はずれであつたかもしれない。そこで内湾と外湾とに分けて調べた昨年とは別に内湾を3つの区域に分けて調べることにした。

図-1で示しているのがその区域である。

ここでこの3つ

の区域を少し説明したいと思う。第①の区域、これは我々の起居した鶴陵中学校藍島分校(図-1の(文)印)から約300m附近、昨年の内湾を調べた区域と近くであり変らない場所である。ここは藍島の中で割合、単純な岩場、小さな入江となっていてわずかに砂場がありその入江の入口あたりで採集。またこの場所には“あおさ”ばかりで、ほかの海藻は見なかったようだ。第②の区域、藍島海水浴場の北端、この時には波が他に比べて割合、静かであり、また海水浴場・船着き場の近くなので、他の場所に比

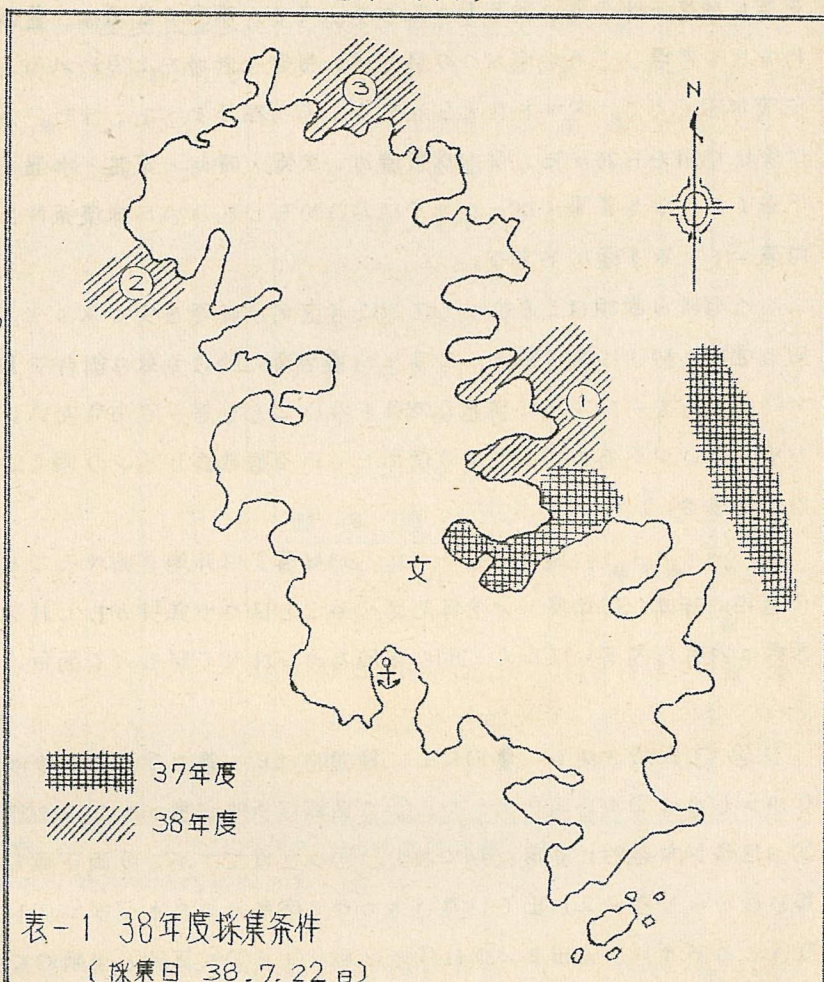


表-1 38年度採集条件
(採集日 38.7.22日)

条件 区域	天気	時刻	気温	水温	風向	P.H.	潮
①	晴	16時	31°C	27.7°C	北北西	6.2	干→満
②	晴	14時	32°C	28°C	北西	6.4	干←満
③	晴	14.5時	32°C	28.5°C	北西	6.4	干→満

べて海水がにごっていて、また油などが浮いていたように思われる。3つの区域の中で最も生存条件の悪い所であつたろう。さて、第③の区域は、藍島の北端、姫島の見たせる岩場。この地域がこの島で最も複雑な岩場だと思われる。採集した時は非常に波が激しくて、ネットをとられそうになる程であつた。またこの地域はウニが非常に多い場所でもあつた。なお採集時の、天気・時刻・気温・水温・風向・P.H.・潮の干満（これらを言葉がぴったりではないかもしれないが採集条件と呼ぶことにする）は表-1 に示す通りである。

さて場所の説明はこの位にして次に各区域の収獲を見てみよう。表-2 は顕微鏡に出る面積に於ける数の割合、つまり同積溶液に於ける数の割合であつて、容積何ccごとに何匹と言つたような精密な調査でないことを言っておきたい。（最も後者のほうが望ましいのであるが、我々の使用している顕微鏡と我々の腕では、そこまでは無理なのである。）

前に述べたように船の都合で今年（38年度）は外湾を調べることが出来なかつたので直接に昨年（37年度）と今年を比べることはやや強引かもしれないが、今年の①の区域は昨年の内湾とほとんど同じ場所なので比べて見るのも面白いのではないかと思う。

①、②、③区域の中で、量的にも、種類のにも、最も多かつたのは①の区域、最も少なかつたのは②の区域であつた。②の区域は条件が悪かつたので納得がいくが、①と②の区域が内容的に非常に似ており、③の区域だけがこの両区域とは異なつていて、種類の面からも表-2に出ていないものや、保育社の日本プランクトン図鑑に載っていないものがずいぶん出た。何故③の区域が①と②の区域と全般的に異なつていたのか？ — ③が①と②に大きく異なつていた採集時の採集条件と言へば、風が強かつた、つまり波が非常に激しかつただけだと思ふ。こうなると浮遊動物には波の激しさが非常に影響するのか？ — その問題は、いまだ、はっきりと解決してはいない。

表-2 S.38.37年度 藍島プランクトンの内容

動 物 性	38 年 度			37 年 度		植 物 性	38 年 度			37 年 度	
	① 区域	②	③	内	外		① 区域	②	③	内	外
蛸 脚 類				○	●	珪 藻 類					
ミクロセテラ	○4	●4	○2	○6	○5	キートケラス	●	●	○2	●3	○3
パラカラヌス	○5	●	○	○1	●3	コスキノリスクス	○1	○1	○1	●1	○2

オイトナ	○2	○2	○5	○3	●4	アステリネオラ	●	●	○	○5	●2
シノカラス						サラミオデイクス	●	●	○	○2	○1
アルカチア	●	○5	○3	●4	○2	ニツチア	●3	○2	○	●	○4
カラス	●	●	○	○2	○1	ストリアテラ	●	●	○3		
ナウプリウス	○3	○3	○4	7		ユーカンピア				6	○
オンケア						ステファンピクシス					
コリケウス				○5		パグテリアストラム					
ユーキータ						スケトレネマ					○
コピリア						アエワオラ					○
ノープリス						リゾソレニア					○
チグリチーブス						リノフィシス					○
カルチア						鞭 藻 類					
チグリオプス						ケラチウム	○2	●3	●	●3	○3
矢 虫 類						ペリリウム				●4	○4
サルパ						ピロフィクス				●	●5
尾 虫 類						アカンソキアズマ					
アラレタマキビの幼生	○1	○1	○1	○	○						

(但し、○は多、●は少で1,2,3区域内での個体数の比較)
番号はその区域内での個体数の多い順

もっと詳しくみてみよう、今年で①、②、③区域の中で共通して、しかも、第1位を占めたのが、アラレタマキビの幼生であった。昨年もかなり出たのであるが、今年ほどではなかった。この成虫、アラレタマキビは岩場の波打ち際、つまり潮間帯にいる小豆粒より一まわり大きな、やや緑色をした巻貝で藍島では、いたる所で見られたので多いのも無理もないと思う。

アラレタマキビの幼生に次いで、今年、昨年とも多かったのは植物性のコスキノリスクスという種である。但し昨年の外湾は内湾ほどでないと言える。この種の内主に出るのはコスキノリスクス：オキュルスイリジス、——ニギガス、——ニパアフオラタス、——ニワイデシ等であろうが、その中でギガスが多数を占める。これらはともに非常に良く似ていて、400倍に拡大しても、良く区別が出来ない程である。またこの種は冷水性であるのに、これが藍島近海に多いと言うのも、研究の余地が十分ある

と思う。またこれは球形であり、その中には小さな球状の粒子がこれはまた、規則正しく並んでいる。これを見ると、まさに、“自然界の驚異”という言葉がピッタリ。何故、こんなに規則正しく並んでいるのか……、このような疑問はプランクトンに限らず、他の生物に於ても見られることではあるまいか。

このコスキノリスクス以外の植物性は昨年ではサラシオディクスが多数を占め、コスキノリスクスと肩を並べる程であって、アラレタマキビの幼虫以外の動物性をおさえていたが、今年は何と低調なこと。昨年と同じ場所の①の区域でさえ、まるでダメ、それでも3つの区域の中では、③の区域にわずかに出たので安心。このサラシオディクスは、これはまたグロリスグな形をしている。縫い針を放射状に並べたようなものであって、またこの針がこれはまた全部長さが等しく、わずかな狂いもない。このを見ている我々高等動物が狂いだらけなのは何故か？、そんなことはどうでもよいとしても、何故、この種が今年は少なかったのか。この種の特徴は、沿岸性で偶発性、特に昨年よく出た、サラシオディクス：フラウエンフェルデーは年中出現し、温帯産で広分布であるところから、環境の変化には他のプランクトンに比べると、割合、強いはずである。今年はホルマリンが少し昨年よりも強過ぎたので、形がくずれたのであろうか。これも研究の余地あり。

次に今年、アラレタマキビの幼虫に次いで昨年と、今年の①、②、③とも平均して多かった、オイトナ・ミクロセテラ・アルカチア・ナウプリウス等について話してみたい。①と②の区域が似ていることを述べたがこれらの点からも伺える。

まずオイトナであるが、典型的な焼脚類（ミジンコ）の型であるが、他の焼脚類よりも丸っこくて、肥満型であるので、割合、見付けやすい。このオイトナは魚のエサにはもってこい。（最もこのミジンコの類はみな魚のエサではあるが）、この種で我々と良くおつきあいするのは、オイトナ：ナナである。ナナと云えばイキな名前でいかにも良さそうには聞えるが、年中出現し、どこにでもいる、変わり種のしないやつだ。

次に、ミクロセテラであるが、外形の大きな特徴は環節のある尾部が足のある側とは反対の側に曲っていると云うことである。まさに、背中を丸めたエビ族の裏切者と云ったところ。これには体長と同じ位の長さの棘状の2本の尾のようなものがあるので、すぐに見分けが可能。これはまた、潮流の速い場所に棲んでいる。波の荒かった③の区域に多かったのはなるほどだと思う。

次に、アルカチアにしよう。去年は割合、出たのだが、今年は①の区域では、さっ

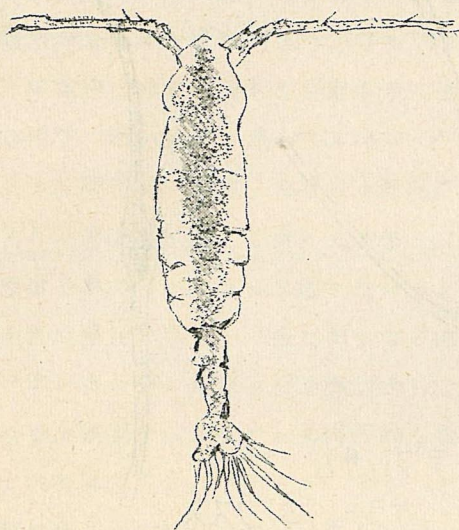


図-2 アカルチア クラウジ

孵化直後の幼生のある一時期の名前である。つまり特定の動物には、ノープリウス期と云う成長時期があるわけである。撓脚類ではないが似た点が非常に多いのでこの類に入れておいた次第である。あとの動物性は、チョボ、チョボといったところ。

次にまた植物性にいこう。鞭藻類であるが、これは、赤潮の原因となるものである。赤潮と云えば、よく耳にするであろうが、これはこの鞭藻類がある環境の変化(これはまだ、はっきり解っていない)で海面近くで、異常発生すると、海面附近の酸素が急激に不足して自滅、その死骸に日光が当たって発生する有毒ガスの為に魚類が死んで、アカリ、プカリと言った具合。ひどい時には、漁民の頭を悩ますことになる。この類は褐色なので、これになると海水が褐色と変わり、赤潮と呼ばれるのであろう。

僕が一番好きなプランクトンはこの鞭藻類のケラチュウムと云うプランクトン。何故って、これは説明は出来ません。あなたも顕微鏡をのぞけば、好きになると思います。三本の脚(普通三本である)をもった流れ屋と言った感じで、その中の1本の脚が非常に退化して、僅かに残っているものもある。こいつは昨年、内、外湾ともに、かなり出現したのであるが、今年はさっぱりで、ガッカリ。それでも、①と②の区域で少し出てくれた。このケラチュウムが、①と②の区域の植物性で、2位、3位を占めているのは、今年は植物性が、いかに、少なかったか、良く解るであろう。このケラチュウムは群棲を成して、いつも何匹かで規則正しく、並んでいる。もっとも、顕微鏡に出るケラチュウムは、ホルマリンに洗われたり、瓶に詰められたりしているので

はポリダメ、③の区域はマイクロセララに次いで多かったのが、こいつだ。これはまた、触角の長さ体の形と言ひ、実にスマートな奴で特徴は、内湾奥部に極多、それでは波の荒かった③の区域に多いのは何故かということになるであろうが、③の区域は、こみ入った岩場で、ふだんは静かな波当りの弱い岩場に棲んでいるものが、この時の荒い波に運ばれていたのではないかと思うが、あくまで推測にすぎない。

次にノープリウスであるが、これは今迄に述べてきたような種の名前ではない。

並んだ姿で、我々の
眼前に現われるのは、
極稀である。

藍島のこの種には
いろいろなものが出
る。例えば、ケラチ
ウム・デフレサム
、——ニフスス、——
——ニフルカ、——ニ
ストリクタム等、中
でもデフレサムが最
も多い。

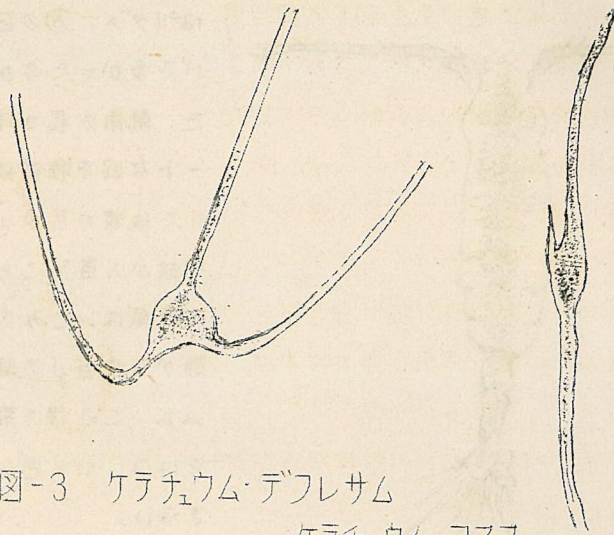


図-3 ケラチウム・デフレサム

ケラチウム・フスス

今まで、ごたごたと、それぞれの種について述べてきたが、これは2ヵ年（実際に
藍島のプランクトンを調べたのは夏期だけだった）の僅かな時期に、余り経験のない
者同志が集って、行ったのであり、研究と名の付くものではないと思う。もっと勉強
しなければならない点や疑問に思うことばかりである。しかし、日本のプランクトン
の研究が、活発になったのは、最近で、参考書と名の付くものは、多くはなく、有っ
ても詳しいものはない。我々が顕微鏡で見たものの中には図鑑（保育社のもの、その
他、2,3冊の図鑑）に出ていないものが3/5を占めていた。勿論、我々の調べた僅か
なものを、“藍島のプランクトン”と断定することが出来ないのは言うまでもないと
思う。藍島についてのプランクトンは、この辺りで、やめにしよう。

多くの者は、プランクトンと言えば、ミジンコと思うだけであらうと思う。勿論、
一般の人々には、今まで、述べてきた事を知る必要もない。しかし次に述べる事は
覚えておいてもらいたい。それは余り、知られていないプランクトンが我々人間の生活
に非常に関係が深いと言う事である。我々の食卓に登場する魚は何をエサとして生
きているのか、考えたことが、あるであらうか。もう言うまでもない。動物性プラン
クトンは植物性プランクトン、（これは主に炭酸同化炭作用で栄養をとる）をエサとし、
魚類は、この動物性、植物性をともにエサとして生きているのである。魚類だけに限
らず、貝類から全ての水棲動物も同様である。全ての水棲動物はプランクトンに始ま
ると言っても過言ではないと思う。非常に魚が好きで、魚がないと、飯が喰えないと
言う人達がいるであらうが、そう言う“猫族”は、特にここでプランクトンに感謝し

ようではないか。前に述べた赤潮も人間生活に影響をおよぼす一例であらう。またプランクトンは環境に非常に微妙な反応を示す生物であるので、海水調査の場合には必ず、プランクトンを調べる。最近、日本の水産界でプランクトンの研究が盛んになったのも、これらの理由であらう。日本は外国に比べるとこれの研究が遅れている。外国に遅れるのは、日本の常であるが、世界の漁業国で、このような事は納得がいかない。非科学的な漁業方法が水産界を大きく支配して、プランクトンの重要性が知られていなかったからであらう。(スコシ、イイスギ)



しかし、僕がプランクトンに興味を持つのは、人間に密接な関係があるからではない。それは“生物界の神秘性”をさぐる喜びを味わう為である(これは少しオーバーかも知れない)と言ってもよいであらう。-----顕微鏡下に展開する原生動物の世界、ミクロンの世界、小さなシンメトリーの世界、-----自然界の驚異を代表しているようなこのちっちゃなプランクトンの世界に入った時には何にもかも忘れて、この小さな友と楽しくすごす。「おお、おい、これをちょっと見てみ」、「わあ、すごい」、「おお、ニリやあ、珍種だ、新種だ」-----こう言った言葉は、自然の驚異が生んだ人間の言葉である。(これまた、オーバー、ドウモスイマセン。) しかも、生きたプランクトンを観る時はこの喜びは格別。ピクピクと動く脚、激しく波打つ心臓、真赤に光る眼点-----まさに驚きの連続-----。プランクトンについての話しは一応ここいらで終止符を打つことにする。

——最後に一言——(特に生物に関心のない方に-----)

生物学は、19世紀に入ってから、目ざましく発達をなした。20世紀を「原子の時代」と呼ぶなら、19世紀は「生物の時代」と言ったところ。これらの発達には、ダーウィンの「航海記」や、ファーブルの「昆虫記」や、ハッケルの「生命の不思議」等の科学的著述によって、促進されたと言えるであらう。しかし生物学と云えば、かた苦しいように、聞えるかも知れないが、決してそんなものではないと思う。-----秋の夜を涼しくする虫の声、台所を這い回るゴキブリ、壁を這うくも、室内を飾る花々、等、

我々の生活に密接な生物は無限と言っても良い程だ。しかし、そんな身の辺の生物に我々は余りにも、無知ではないであらうか。誰がいつ、アメリカを発見したのか、誰が、蒸気機関を発明したのかと言うことは、たいていの歴史の本に書いてあるが、ほたるの光源、うなぎの故郷、さんごや海綿の本性が、いつどのように誰によって発見されたか、やじかりといそぎんちやくがどのように共生するか、たいていの者は知らないであらう。

どんな人でももっと生物のファンになろうではないか！

サラリーマンでも、芸術家でも、政治家でも、家庭の主婦でも、スポーツマンでも、運転手さんでも、船員でも、お坊さんでも、誰でも、気安に、下駄ばきのままで、生物の国に出掛けよう、また、友を誘おうではないか！！

表-3 藍島調査に於けるプランクトン目録

植 物 性	37年度	38年度	性 質
珪 藻 類			
・ <i>Coscinodiscaceae</i> 科	○	○	
コスキノリスカス オキュルスーイリ	○	○	稀 冷水期 外洋
ギーガス	○	○	極多 冷水期
パアフオラタス	○	○	極多 冷水期 外洋
ワイデシー			極多 冷水期 北温性
・ <i>Rhizosoleniaceae</i> 科			
リゾソレニア スチリフォルシス	○		暖水期 温帯性
・ <i>Bacteriastreae</i> 科			
バクテリアストラム コモサム	○		普通 沿岸内湾性
・ <i>Chaetocerosporadoxum</i> 科			
キートケロス パラドクサム	○		暖水期 普通 亜熱帯
コンプレサス	○		極多 年中 沿岸内湾性
ディディアス	○		極多 暖水期 広温帯性
ジラカス	○		極稀 暖水期 熱帯

アフィニス	○		極多 年中 広分布
リリムス		○	
パイアテアンス	○		普通 暖水期 温帯
・ <i>Cyttarocyliida</i> 科			
シンチナッポシス ラデックス		○	
・ <i>Biddalphiaceae</i> 科			
ヒドルフィア シネンシス	○	○	稀 暖水期 外洋性
トリケラチウム ファブス	○	○	稀 広分布 過剰性
シケクラトム			
・ <i>Eucampiaceae</i> 科			
ユーカンピア ズーアクス	○		極多 冷水期
・ <i>Fragilariaceae</i> 科			
タラシオリスクス フラウエフェルデー	○		極多 年中 広分布
・ <i>Nitzschiaceae</i> 科			
ニツチャ セロアタ	○	○	年中出現 広分布
ロングシマ	○	○	稀 春夏 過剰性
イクス チッサム	○	○	
鞭 藻 類			
・ <i>Reridinidae</i> 科			
ケラチウム トリホス	○	○	
デフレサム	○		極少 暖水期
フルカ	○		極多 年中出現 広分布
フスス	○	○	普通 暖水 沿岸内湾
マシリエンゼ	○	○	普通 暖水期
モーレ	○		稀 暖水期 暖海外洋性
ストリクタム	○		極稀 暖水期 暖海外洋性
テヌエ	○		暖海外洋性
インタメリウム	○		稀 暖水期 外洋暖海流
ペリリニウム ユニカム	○		普通 広分布
ペンタゴナム	○		稀 暖水期 外洋性

デフプレサム	○	○	普通 暖水期 広分布
リリノフィシス ホムンワルス	○		稀 暖水期 外洋性
動物性			
橈脚類			
・ Calanus 科			
・ パラカラヌス パブルス	○		極多 沿岸内湾性
・ カラヌス フインマルキクス	○		普通 四季出現 沿岸
・ Oithonidae 科			
・ オイトナ ナナ	○	○	極多 年中出現 内湾性
・ シリミス	○		普通 冷水期 沿岸
・ Acartiidae 科			
・ アカルチャ クラウジ	○	○	極多 冷水期 内湾
・ エリスレカ	○		極多 暖水期 内湾
・ Oncaeidae 科			
・ オンケア ヌデア	○	○	極多 湾口部 暖海性
・ ベヌスタ	○		多 暖水期 外洋性
・ Harpacticus 科			
・ ミクロ セツテラ	○	○	極多 内湾 沿岸
・ Corycaeidae 科			
・ コリケウス S P	○	○	沿岸 外洋暖海性
・ ノープリウス	○	○	孵化直後の幼生の形
・ ふくろむし 科			
・ サツキュリナ		○	甲殻類の腹部に寄生
・ Cladocera 科			
・ エバドネ テルケスチナ		○	極多 暖水期 沿岸
・ ぐんかんくらげ 科			
・ ホルピタ アムベラ		○	
浮遊期幼生			
・ ふじつばのナウプリウス期		○	ふじつば 孵化直後の幼生の形

しょうじんがにのゾエア期	○	○	
まき貝のベリジア期		○	
まき貝のアラレタマキビ	○	○	親貝は潮間帯、卵は浮遊。

(但し、○印は比較的多く観たもの)

又、藍島ニイキタイ-----。

THE END.

植物班

藍島採集旅行記

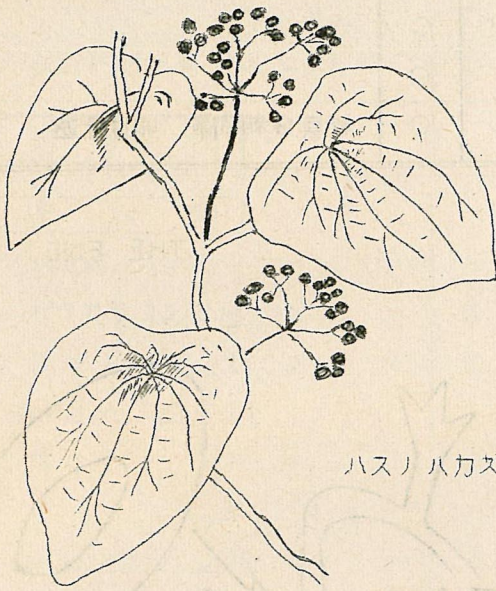
2年 吉生正人

[21日] あこがれの目的地、藍島へ到着。

先発隊も一箱になって、採集道具や、これ程のものが腹に入るのかと、恐ろしさに足が震える程の野菜類を、苦労して藍島中学校へ。

この日は道具の整頓や今後の生活の準備の為にあわただしく追いまわされた。又幹事や先生の説明・注意も詳しく行なわれ、明日からの覚悟を決めねばならなかった。この日は採集どころではなかったけれど、トンネルの近くで、小倉辺にはない、暖地植物、サイカイマブマオウや、ダンチクを見ることだけは出来た。

[22日] 吉岡先生がおいでたので、我班員は全員連れ立って出発した。学校の辺からうす暗い坂道を登る。そのやや暗い土手には、ウラジロ・コシダ・タチシノブなどのシダ類が幅をきかせている。坂をほとんど登りきると、少し見晴しのきく所へ来た。道の右手にはずっとハスノハカズラが、他の植物の生長を妨げてその上をあっかまし



ハスノハカヅラ

ばかりでなく、葉の付き具合からして妙ちきりんであり、三角状卵円形のその葉の葉柄は指状にくっ付いているのだ。ほんとうにあきれた変わり者である。

吉岡先生の貴重な御言葉を先輩の井上さんに書き取ってもらって、我々は根掘りと胸乱で働いた。道を完全に登り切ると狭い野原が右手にある。よく注意して低い縁をのぞくと、ちっちゃなかわいらしい青色の花がある。ルリハコベだ。この上品でかわいらしい植物は、暖地性・海浜性

という性質があり、この島における代表的株植物として胸乱におさめた。

空は青々と澄んで、奥深く広がり、白い雲が、全く静止して浮んでいる。その上、土は乾きに乾いて、夏の感をいっそう深めた。ほぼ平らなこの道を行く。途中、タケの花に出会った。吉岡先生は、ノダケの花ではないかと、一瞬目を光らせられたが、よく見ると、やはりマダケであつたので、我々もガツカリした。ノダケの花は極めて稀であるという。それでも初めてタケの花を見ただけで十分嬉しかった。

この島の中心道と言えるこの道を更に北へ進んだ。間もなく、この島の最高地点に近い所で、吉岡先生が右手のやぶをみつめて立ち止まれた。先生は何かつづやかれながら、やぶの中の木の枝を折って、その葉を人差し指と親指で、こすっておられる。“オオムラサキシキブ”だ。先生は言われた。なるほど、ムラサキシキブより大形ではあるが似通った所がある。一見何の魅力もないような植物で

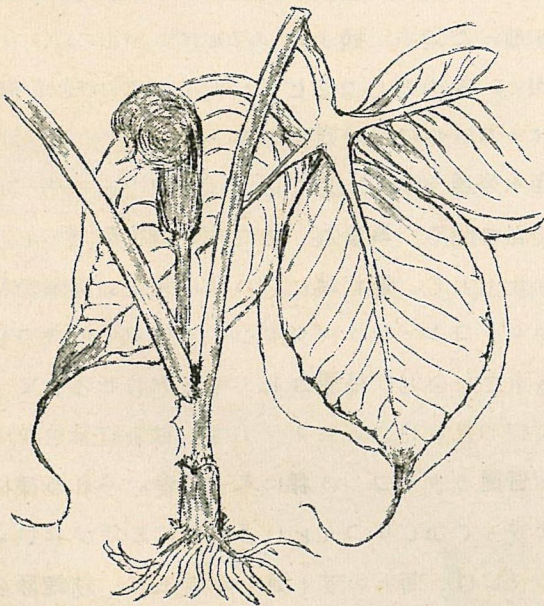
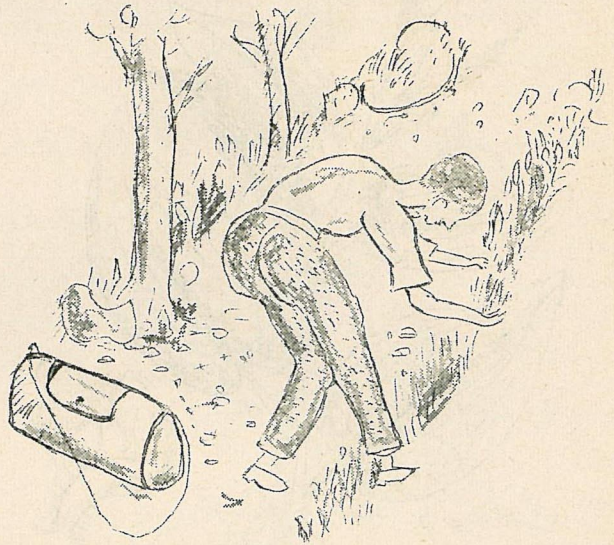


ルリハコベ

はあるが、この島では初めての
収獲物で、この島の他の所には
全然見かけたことがない。リッ
パは収獲物として、さっそく胴
乱におし込んだ。

更に進んだ後、右手の暗い坂
道に折れた。さっそく大きな三
葉を広げたムサシアブミがある。
その内穂花を包む紫色を帯びた
無気味な仏焰は、緑のうちでも
最も陰気な、毒々しい色の大き
な葉と共に、薄暗い所にいっそ
う無気味な雰囲気をつけ加えた。

おまけに有毒植物でもあるのだ。間もなく田んぼの傍に出た。ネコノキなどの木本科
植物、それに、帰化植物であるアメリカセンダングサを採集して、その細い道を進む
と、やがて湿地の辺に出た。ヒトモトススキなどの単子葉植物を主として、いかにも
生活力の旺盛な感じの雑草がうっそうとはえて、そこは両棲類の天国でもあるらしく、



ムサシアブミ

我々が歩く度毎に小さなカエルが、
ピョンピョン跳び出てくる。カエ
ルには災難であろうが、時々、
靴の下で何やらつぶれる音がした。
我々はカエルに対しては威張った
ものであるが、そのカエルを大好
物とするヘビも多かろうと思うと、
進む足もおじけづいた。短い糸の
雑草の中に、チラチラとピンクの
かわいらしい花が見える。ネジバ
ナ。なるほど名の如く、花が穂状
についている茎の部分はねじれて
しまっている。うまい名前を着け
たものだ。花れん坊の自分でさえ、



ハンゲショウ

早く、これを覚えてしまった。ハンゲショウもその辺にあった。これは、半夏生（七月）の頃、上部の葉が白色に変ずるのでこの名がある。

少し進むと、海岸近くに出た。やはり湿地である。きたない、どす黒い木の溜った所に、ヒメガマがピンと背を張って直立している。その穂はいかにもビロードの様にやわらかい肌ざわりである。学校に植えようと、それを懸命に抜きにかかったのはよかったが、一張

羅のズボンに黒く、ビベ臭いしみをつけてしまった。その横に積んである貝がらの山を音をたてる為（ため）にわざわざ踏んで喜んだ。ガラガラと貝殻の音がした。

それから山の方の中心道へと向った。途中の赤土の小道は木の葉のかげとなり、その葉の間から、わずかな木切れ日がやって来て、いかにも夏にふさわしく、赤い地面の上で、白く丸い光がゆらめいた。外の日光は強い。昼食の用意をする為（ため）に急いで学校へもどったが、その途中、さっき折れ曲った辺で、頭上に、マルバシャリンバイやハマビワをみつけた。ハマビワは名の如く、葉の感じなどビワに似ているのだが、ビワとは違って、第一、おいしい果物とならないのは至極残念であった。

〔23日〕 午後、北岸をまわった。元海水浴場であった辺では、ハマゼリ・ハチジョウイチゴ・ヤブソテツがある。又茶色の岩の間で、真黄な、あざやかな花をぎゅしりと並べているツワブキは美しい。そこを北上して、最北端に近い所へ来た。海岸の砂地には、オカヒジキ・ハマボツス・ハマダイコン・ホソバクダン・イワタイゲキなどがある。オカヒジキはなるほど砂にまみれていると、海藻のヒジキと思わせる。又、この若葉をゆでて食べるので、この名が付いたという。ハマダイコンは淡紅紫色の小さな花をたくさんつけている。その根が普通のダイコンの様に太く、食べられる様にならないのは残念である。これでは潮で洗ってかじりつくというわけにも行かない。いつもの癖は出さずにすんだ。ホソバクダンは、海水のすぐ近くの岩上に、紡錘形の太い根で、へばり付いている。根の太い上、葉は水分が多く、こういう悪質なものは

標本にしにくい。さらにその近くの砂浜で、淡紅紫色の花をつけた蔓草のハマナタメヤ紫色の美しい花のハマエンドウなど、マメ科の植物があちこちにはえているのを見た。

帰りはわざわざ変な道を選んだ。一本道を牛がふさいでいて、恐ろしいので遠まわりをしたり、道に迷って妙な場所へ出たり、というわけだ。それでもおかげで細かな道までよく覚えた。

泳ぎに行った人もいたが、疲れたのでやめにした。大した成果は上がらなかった。

〔24日〕 朝から掃除や帰り仕度に追われた。いよいよ帰るとなると、

何となく心残りがして、閉口した皿洗いや、まあおいしかった食事のことや、眠る前に闇の中で話した色々なことを思い出す。昼頃、いよいよ荷物を船着場へ運ばねばならなくなった。残念。食料が片付いているので来る時よりはずっと楽であった。皆来る時程の元気はなくなっていたが、それでも、それほどは疲れていない様だ。船着場の近くの氷屋で冷たい氷を食べて、涼しくなったところで船に乗り込んだ。間もなくして瑛玉の音が鳴り始め、船は岸を離れた。そのとたん全く気抜けがして、何ともつかぬ空虚な気持ちに変わり、そうしているうちに藍島はまたたく間に遠ざかった。楽しい珠集旅行であった。藍島はもう遠くに平に見えるだけだ。採石場の岩肌が白く光り、その近くに高い松が見える。



ハマエンドウ



藍島植物採集目録

離 糸 花 類

科	和 名	学 名
あ か ざ	オカヒジキ	<i>Salsola Komarovi</i> Iljin.
あ か ば な	コマツヨイグサ	<i>Oenothera odorata laeniata</i> Will.
あ ぶ ら な	ハマダイコン	<i>Raphanus sativus</i> L. var. <i>kortensis</i> Baeker f. <i>raphanestroides</i> Makino.
い ら く さ	サイカイマブマオ	<i>Boehmeria grandifolia holosericea</i> Blume.
お と き り ど う	オトギリソウ	<i>Hypericum erietum</i> Thunb.
き ん ぽ う け	ウマノアシガタ	<i>Ranunculus acris</i> var. <i>japonicus</i> .
	キツネノボタン	<i>Ranunculus quelpaetersis</i> Nakai.
	センニチソウ	<i>Clematis terniflora</i> .
く わ	イヌビワ	<i>Ficus erecta</i> .
	オオイタビ	<i>Ficus pumila</i> .
	カナムグラ	<i>Damulus japonicus</i>
つ ぶ ら ふ じ	ハスノハカズラ	<i>Stephania japonica</i> (Thunb) Miers.
ざ く ろ そ う	ツルナ	<i>Tetragonia tetagorioides</i> (Pull) G. Dumtye.
す べ り ひ ゅ	スベリヒユ	<i>Portulaca olearacca</i> .
す み れ	ナガバノタチツボスミレ	<i>Viola ovato oblonga</i> .
せ り	ウマノミツバ	<i>Saniculla chinensis</i> .
	オオチドメ	<i>Hydrocotyle samiflora</i> Maxim.
	ツボクサ	<i>Centilla asiatica</i> (L) Urban.
	ハマゼリ	<i>Cnicidium japonicum</i> My.
	ハマボウフウ	<i>Glehnia littoralis</i> Fr. Schm.
	ミツバ	<i>Cryptotaepia canadensis</i> D.C. subsp. <i>japonica</i> .

科	和名	学名
た で	マブヅラミ	<i>Torillia Amthricus</i> .
	オオイヌタデ	<i>Polygonum nodosum</i> .
	ゴギシギシ	<i>Rumex dentatus subox</i> .
	ハルトラノオ	<i>Polygonum Teivicaule</i> .
	ママコノネリヌグイ	<i>Polygonum senticosum</i> (Meiss) <i>Freet sin Paicaria senticosa Nakai</i> .
ミチマナギ	ミチマナギ	<i>Polygonum uriculane</i> .
	イワタイゲキ	<i>Euphorbia Jolkini Boiss</i> .
	ハンゲショウ	<i>Saururus chinensis</i> .
	ナズナ	<i>Capsella bursa-pastoris</i> .
	ハマナデシコ	<i>Dianthus japonicus Thunb</i> .
ば り	マンテマ	<i>Silene gallica</i> .
	キンミズヒキ	<i>Agrimonia Eupatoria var. Pilosa</i> .
	ハマナス	<i>Prunella rugosa</i> .
	ハマビワ	<i>L. japonica Miob</i> .
	ホウロクイチゴ	<i>Rubus Lieboldi Plume R.</i>
ぶ ど う	エビズル	<i>Kaphilopia unvellate</i> .
	キレハエビズル	<i>Vitis Thunbergii</i> .
	ナシカズラ	
	ノブドウ	<i>Ampelopsis heterophylla</i> .
	ゴドウ	<i>Vitis 3 vinifera</i> .
ばんけいそう ま め	タイトゴメ	<i>Sedum oxyifolium Makino</i> .
	クズ	<i>Pueraria lobata (Wild) Ohwi P.</i>
		<i>hirsuta Matsum Mielethia japonica</i> .
	ヌスビトハギ	<i>Desmodium racemosum</i> .
	ネコハギ	<i>Lespedeza pilosa (Thunb) Siecht.</i>
	ハマエンドウ	<i>Zucc.</i> <i>Lathyrus maritimus (L) Canavalia</i>

科	和 名	学 名
	マルバハギ	<i>lincata</i> (Thunb), D. C.
	ミソナオシ	<i>Lespedeza cyrtobotrya</i> .
	メドハギ	<i>Lespedeza cuspeata</i> (Dumont de Courset) G. Ron <i>Lotus corniculatus</i> <i>L. var japonicus</i> Regel.
	ヤブマメ	<i>Amphic aryoer Edgeworthii</i> Benth <i>var japonica abiner</i> .
	ナツフジ	<i>Millettia japonica</i> .
	ハマナタマメ	<i>Canavalia lineata</i> .
やまごぼう	ヨウシュヤマゴボウ	<i>Phytolacca americana</i> .
ばら	マルバシマリンドイ	<i>Phaphiopsis umbellata</i> Makino <i>var. montensis</i> .

合 弁 花 類

あ か ね	クルマバアカネ	<i>subsp pratensis</i> (Maxim)
	ハクソカズラ	<i>Paederia scandens</i> (Lour).
あ さ が お	コヒルガオ	<i>Calystegia hederacea</i> .
ら り	キカラスウリ	<i>Trichosanthes kirilowii</i> Maxim <i>var japonica</i> (Miq).
	モミジカラスウリ	<i>Trichosanthes multiloba</i> .
か が い も	カガイモ	<i>Metaplexis japonica</i> (Thunb) Makino.
お み な え し	ヨトコエシ	<i>Patrinia villosa</i> .
き き ょ う	ヒメギキョウ	<i>Campanula drabifolia</i> Sibth et. Sm.
き く	アキノキリンソウ	<i>Solidago Virgaurea Lactrica</i> <i>indica</i> L.
	アメリカセンダングサ	<i>Bidens frondosa</i> L.

科	和名	学名
	オニタビラコ	<i>Youngia japonica</i> .
	キクタニギク	<i>Chrysanthemum boreale</i> (Makino).
	コウゾリナ	<i>Picris hieracioides</i> L. subsp. <i>japonica</i> (Thunb.).
	コオニタビラコ	<i>Lapsana apogonoides</i> .
	タカサブロウ	<i>Eclipta prostrata</i> (L.) L.
	チチコグサ	<i>Gnaphalium japonicum</i> (L.f.) Ritam.
	ハハコグサ	<i>Gnaphalium affine</i> D. Don.
	ツワブキ	<i>Farfugium japonicum</i> (L.f.) Ritam.
	ハルノノゲシ	<i>Sonchus oleraceus</i> .
	ヒマワリ	<i>Helianthus annuus</i> .
	ヒメジオン	<i>Aster fastigiatus</i> .
	ホソバワダン	<i>Crepidiastrum lanceolatum</i> (Maxim) Nakai.
	ヤクシソウ	<i>Youngia denticulata</i> (Hartt.) Ritam.
	ヤブタビラコ	<i>Lapsana</i> .
	ヨキギ	<i>Artemisia Princeps</i> Pamp.
ごまのはぐさ	オオイマノフグリ	<i>Veronica persica</i> Poir.
	フユサンゴ	<i>Solanum Pseudo Capsicum</i> .
さくらそう	オカトラノオ	<i>Lysimachia clethroides</i> .
	コナスビ	<i>Lysimachia mauritiana</i> .
	ルリハコバ	<i>Anagallis arvensis</i> .
し そ	コバノタツナミ	<i>Scutellaria indica</i> L. var. <i>parvifolia</i> Makino.
	タツナミソウ	<i>Scutellaria indica</i> .
	ヒメシロネ	<i>Lycopus Moackianus</i> .

科	和 名	学 名
すいかずら	スイカズラ	<i>Lonicera japonica</i> Thunb.
	ハマサンボク	<i>Viburnum japonicum</i> .
	ハマエンドウ	<i>Lonicera affinis</i> .
な す	イヌホホズキ	<i>Solanum nigrum</i> L.
	ヒョドリジョウゴ	<i>Solanum lyratum</i> Thunb.
むらさき	ミズタビラコ	<i>Trigonotis brevipes</i> .
むらさきそう	スナビキノウ	<i>Messerschmidia sibirica</i> L.
し そ	メハジキ	<i>Leonurus sibiricus</i> L.
しんけい	クルマバナ	<i>Clinopodium chinense</i> .
き く	サツマノギク	<i>Chrysanthemum Decussatum</i> .

単 子 葉 類

が ま	ヒメガマ	<i>Typha angustata</i> .
かやつりぐさ	タマガヤツリ	<i>Cyperus difformis</i>
	ナキリスゲ	<i>Carex brunnea</i> .
	ヒトモトススキ	<i>Cladum Mariscus</i> .
	ヤマイ	<i>Fumbristylis subultrispicata</i> .
か ほ ん	オオエノコロ	<i>Setaria gigantea</i> .
	カモノハシ	<i>Lochaemum Sieboldi</i> .
	ダンチク	<i>Arundo bifaria</i> .
	チゴザサ	<i>Onlismenus nodulatifolius</i> .
	ヒメコバンソウ	<i>Briza minor</i> .
	マダケ	<i>Phyllostachys bambusoides</i> .
	ヤマカモジグサ	<i>Brachypodium japonicum</i> .
	ムサシアブミ	<i>Arisema ringens</i>
きといも	ハマスゲ	<i>Cyperus rotundus</i> .
す げ	イグサ	<i>Juncus effusus var. decipiens</i> .
とうしんそう	カエデドコロ	<i>Dioscorea quiqueloba</i> .
やまいも	ヤマイモ	<i>Dioscorea japonica</i> .

科	和 名	学 名
ゆ り	ウバユリ	<i>Lilium coidatum</i> .
	ソクシンラン	<i>Aletis japonica</i> .
ら ん	カラスビシャク	<i>Pinellia ternate</i> .
	ネジバナ	<i>Spiranthes australis</i> .
すいせん	ハマオモト	<i>Crinum asiaticum</i> .

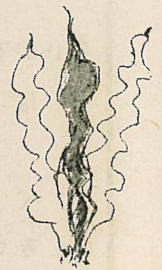
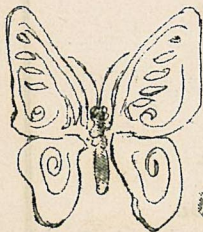
木 本 類

あ け び	トキワアケビ	<i>Stauntomia hexaphylla</i> .
あみぐみ	マルバグミ	<i>Elacagns macrophylla</i> Thunb.
か え で	カクレミノ	<i>Acar trifidum</i> .
き ぶ し	ナンバンキブシ	<i>Lamifolius Hoidg.</i>
きょうちくとう	テイカカズラ	<i>Traehelospermum jasminoides</i> .
くまつづら	ク サ ギ	<i>Clerodendron tricotomum</i> .
	オオムラサキシキブ	<i>Callicarpa japonica</i> Thunb var <i>luxivians</i> Rehd.
	ムラサキシキブ	<i>Callicarpa japonica</i> .
	ハマゴウ	<i>Viter trifolia</i> var <i>obata</i>
くろうめどき	ネコノチチ	<i>Phammella franguloides</i> .
さるなし	ナシカズラ	<i>Actinidia callorar</i> var <i>rufa</i> .
さわふたぎ	ク ロ キ	<i>Symplocos lucida</i> .
さんしょう	イヌザンショウ	<i>Fagara schinifolia</i> .
	コクサギ	<i>Orixa japonica</i> .
	ハマセンダン	<i>Evodia miliiifolia</i> .
すいかずら	ハクサンボク	<i>Viburnum japonicum</i> .
フ ば き	ツ バ キ	<i>Camellia japonica</i> .
	ハマヒサカキ	<i>Eurya emarginata</i> .
と べ ら	トベラ	<i>Pittosporum Tobira</i> .
にしきぞう	カンコノキ	<i>Glachidion obovatum</i> .
にくすく	シロダモ	<i>Litsea glanca</i> .

科	和 名	学 名
にしきぎ	テリハツルウメモドキ	<i>Celastrus articulatus</i>
まんりょう	ヤブコウジ	<i>Ardisia japonica</i> .
もちのき	クロガネモチ	<i>Ilex rotunda</i> .
もくせい	イボタノキ	<i>Ligustrum Ibo</i> .
もくらん	ビナンカズラ	<i>Hedysura japonica</i> .
くすのき	ヤブニツケ	<i>Connamoirusa pedunculatum</i> .

羊 歯 類

うらじろ	ウラボシ	<i>Gleichenia japonica</i> .
うらぼし	ミゾシダ	<i>Dryopteris africana</i> .
	ワラビ	<i>Pteridium aquilinum</i> .
	コシダ	<i>Gleichenia lincolns</i> .
	タチシノブ	<i>Apocynum japonicum</i> .
	ホシダ	<i>Dryopteris sokoroides</i> .
いのもとし	イワガネソウ	<i>Comogramme japonica</i> .
	イノモトソウ	<i>Pteris multifida</i> .
	ホラシノブ	<i>Odontosoria chinensis</i> var.
おしだ	イタチシダ	<i>Dryopteris pacifica</i> .
	オニヤブソテツ	<i>Cryptomium faleatum</i> .
	ホソバカナウラビ	<i>Polystichopsis aristata</i> .
	ヤブソテツ	<i>Cryptomium fortunei</i> .



藍島の昆虫

2年 田中丸 雅 雄

藍島の昆虫については昨年かなり調べられた。それをもっと深く研究しようと、私たちは試験の終わった次の日曜日や夏休みを利用して採集に行き、大きな成果をおさめた。

採集を行った日、

5月26日、6月9日、7月21日、22日、23日、24日、

今年は甲虫を中心に、採集し、昨年まで採れなかった種を数多く採集した。藍島の昆虫を二年間調べて、まだその途中ではありますが、一応まとめておく。

藍島は若松の北方7kmにあり、鰐瀬に浮かぶ孤島で、対馬海峡にあらわれ、関門海峡の潮流のため付近の流れは速い。島は北面から南東にほぼ長くのびて、長さは約2km、幅約0.5kmで、その海岸は細かく入りこんでいる。この入り江を漁港として利用し、ここには80戸あまりが半農半漁の生活をしている。島は海岸からすぐに崖になるところが多く、中央部は平らになり、台地状である。この台地の上に畑があり、さつまいも、にんじん、なす等が植えられている。また、休閑地には牛が放牧されている。入り江付近は少しひらけていて、水田がある。水田と畑との間の斜面には、マツ、ハマビワ、シロダモ、テイカズラ、トベラ、ハマヒサカキ、クヌギ、タブ、イチダク等の海浜性の樹木や、油桐樹が多く、茂り、畑のまわりには、ダンテグ、ヤブガラシ、カラスウリ等の植物がはえている。

昨年まで採集されなかった種、

オオキベリアオゴミムシ	キ イロテントウ
オオホソクビゴミムシ	ヒメアカホシテントウ
ウミベアカバハネカクシ	シロスジカミキリ
オオマグソコガネ	アトボシハムシ
フタホシマグソコガネ	オオキイロマルノミハムシ
ウスチャコガネ	ルリハムシ
ヒメハナムグリ	シロコブゾウムシ
ルイスヒラタチビタマ	アサギマダラ

これらの種は昨年までは、この島に生きていなかったというのではなく、私たちが採集できなかったのである。これらのうちあまり注目すべきものはないが、フタホシマグソコガネ、ルイスヒラタチビタマはやや少ない種である。また今年あまり採集できなかった蝶類では、アサギマダラを採集した。これは、7月21日に、海岸より畑に登

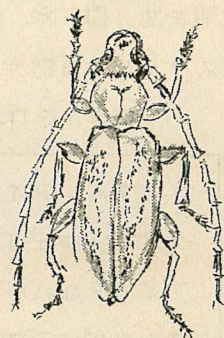
る途中の坂道で、木の間をゆるやかに飛んでいた。蝶の種類の少ないこの島では、アサギマダラは意外な収獲だった。

今年と昨年との頭数のいちぢるしく違う種。

	37	38		37	38
ルリエンマムシ	9	1	ヒメサビキヨリ	12	0
マ ノ ゴモクムシ	17	2	センノカミキリ	1	4
クチケマグソコガネ	5	0	カノコサビカミキリ	36	5
クロコガネ	33	0	テツイロヒメカミキリ	22	3
シロテンハナムグリ	18	3	クワカミキリ	11	0
ヒラタハナムグリ	1	10	ヨモギハムシ	1	9
コアヲハナムグリ	1	7			

上の種においては昨年と今年との変化が大きい。この原因が何であらうかと考える。しかし、それはよく私には分からないが、採集日が昨年と少しちがうことがある。それと虫が一年おきに多く発生するということも考えられるが、それはまた来年にならないとわからない。なお長期旅行のときの天候は今年昨年とも同じような天候であり、採集者の人数、技術ともあまり変わらないと思う。

次に藍島と他の地を比較してみる。今年は福智山、障子岳などに行って、その結果を比較してみると、藍島の昆虫の特色が少しわかった。その特色とは、一つは海浜性昆虫が多い。それはカミキリ科のウスモンアヤマカミキリ、カノコサビカミキリ、ワタカミキリ、テツイロヒメカミキリ、ハネカクシ科のウミベアカバハネカクシ、ハンミョウ科のトウキョウヒメハンミョウ、シロヘリハンミョウなどである。そして、これらの種は北九州本土では少ない。福智山、障子岳などではほとんどいない。しかし、藍島では簡単に採集できた。



× 2.5
ウスモンアヤマカミキリ

二番目に、それぞれの種の個体数が多く、その食樹や食草で簡単に採集できる。たとえば、ウスモンアヤマカミキリのダンテク、カノコサビカミキリとテツイロヒメカミキリのタラノキ、クワカミキリとワモンサビカミキリのイチヂク、ヒメコガネのマブ

カラシ、カナブンとヒラタクワガタのダブノキ等がそれである。個体数の多い原因は、それぞれの種がこの小さな島で繁殖したためであろう。これらの特色は、藍島は、藍島が小さな島であること、付近を対馬海流が流れていること。関門海峡の潮の流れ等に大きく影響されているようである。

全体として藍島の昆虫をみると、植物相が貧弱で、自然の変化にとばしいため、昆虫相も貧弱である。



× 3

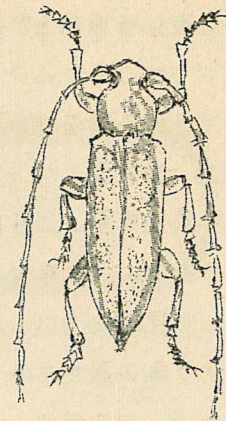
カノコサビカミキリ

カミキリの出現状況を右のような表にしてみました。この科をえらんだのは、それぞれの個体数が他の種よりも多いこと。カミキリは比較的季節の変化に敏感なものが多くということなどである。これらの種の多くが全国平均の出現より、いくらかはやめである。これは藍島が海にかこまれ、対

馬海流のため、温暖であるからだろう。

長期採集旅行の際、いろいろの採集方法をしてみたので、その成果をのべておこう。

第一に夜間採集。これは白布のまくを立て、アセチレンランプでこれを照らして、



× 3

アマモンチビカミキリ

藍島におけるカミキリの出現期

	4	5	6	7	8	9
クスベ=カミキリ				○		
キイロミヤマカミキリ		○	○	○		
テツイロヒメカミキリ				○		
タケトラカミキリ		○	○	○	○	
ヨツスジトラカミキリ		○	○	○		
ホシベ=カミキリ		○	○	○		
ゼンノカミキリ				○	○	
ウスモンアヤカミキリ		○	○	○		
ワモンサビカミキリ		○	○	○	○	
カノコサビカミキリ				○	○	
コブスジサビカミキリ		○	○	○	○	
アマモンチビカミキリ		○	○	○	○	
キクスイカミキリ		○	○			

昆虫の走光性を利用して、これに集る昆虫を採る方法である。37年は4回、38年は2回いろいろ場所をかえてしてみた。37年はハイイロカミキリモドキ、ヒメガムシ、ニジツヤゴモクムシ、オオトモエ、38年はハイイロカミキリモドキ、サクラコガネ、その他不明な蛾数種を採集した。それらの夜は空のからっと晴れた新月であつたせいか、成果は上がらなかった。

第二に腐肉採集。これは動物の死骸などをカンに入れ、カンの上の部分が地面と同じ高さになるように埋める。その腐敗したものを食べにくる昆虫をとるものである。腹のへった昆虫たちは、我々採集家のワナとは気づかずに、簡単にかかる。37年はコチという魚の煮たものを用い、島の南の畑の回りに埋め、ミイデラゴミムシ、ヒメサビキユリ。38年はトノサマガエルの死骸を用い、島の中央付近の畑の回りにうめ、ミイデラゴミムシ、オオホソクビゴミムシ、ウミベアカバハネカクシ、オオミツノエンマコガネなどを採集した。

第三に糖蜜採集で、これは黒砂糖と焼ちゅうを混ぜたものを、タブヤクヌギなどの木の切り口塗る。これに集まる虫を採集する。これではタブでヒラタクワガタ、カナブンを採集した。

第四に島に放されている牛の糞に集まる昆虫を採集する方法で、これでカドマルエンマコガネ、クロマルエンマコガネ、オオマグソコガネ、フタホシマグソコガネ、フチケマグソコガネ、ルリエンマを採集した。

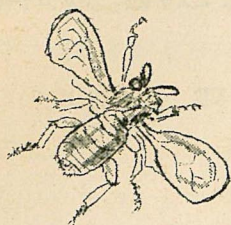
過去二年間の調査でかなり深く調べられたが、このままで終らず、もっと藍島の調査を続けてほしい。

また、37年の採集品で不明なもの数種を安富和男先生にお願いしました。それをここにフリくわえておきます。

- | | |
|--|---------------|
| 1. <i>Encolopodes japonicus</i> MOTSHULSKY | ハラアカモリヒラタゴミムシ |
| 2. <i>Ophionea indica</i> THUNBERG | アオオビクビナガゴミムシ |
| 3. <i>Anoplogenus cyaneicens</i> HOPE | キベリゴモクムシ |
| 4. <i>Talpela brunnea</i> MARSEUL | イクビゴミムシダマシ |
| 5. <i>Diaperis lawisi</i> BATES | モンキゴミムシダマシ |
| 6. <i>Phasdis helopioides</i> MARSEUL | ズビロキマワリモドキ |
| 7. <i>Allecula melanaria</i> MAKLIN | クチキムシ |
| 8. <i>Anthicus monstrosicornis</i> MARSEUL | ヒゲブトホソアリモドキ |
| 9. <i>Cletus trigonus</i> THUNBERG | ホソハリカナムシ |

10. *Lygus apialus* FIEBER
 11. *Scolia tokisensis* BETREM

ミドリメクラガメ
 モンハラナガツチバチ



藍島昆虫目録

この目録は、38年だけのものであるから、37年の採集品の記されているユーカリ 11 号と比較してみるとよいと思う。

() の中は採集日と頭数と採集者名を示す。頭数の多いものは、採集者名を省略する。

また今年は蝶類の採集品が少ないので省略する。採集品は小倉高校生物部に置いてある。目録作成にあたって、次の文献を参考にした。

北 隆 館 : 原色昆虫大図鑑 II (昆虫編)

保 育 社 : 原色日本昆虫図鑑 (上)(下)

採集者 柿本哲爾、水上建二郎、酒巻裕三、品川一郎、

田中丸雅雄、安井玄治、岡本研作、

はんみょう科 *Cicindelidae*

1. ヒメハンミョウ (24 ex 22-VII, 2 ex 23-VII)
2. シロヘリハンミョウ (3 ex 22-VII)
3. トウキョウヒメハンミョウ (5 ex 22-VII)

ハンミョウは海岸の砂浜やむらたい岩に、群がっているものを採集する。

ひょうたんごみむし科 *Scaritidae*

1. ホソヒョウタンゴミムシ (1 ex 22-VII 酒巻)

ごみむし科 *Darphalidae*

1. *Eucolporles* の一種 (1 ex 26-V 安井, 1 ex 23-VII 安井)
2. アオグロヒラタゴミムシ (2 ex 26-V, 2 ex 9-VI)
3. オオヒラタゴミムシ (2 ex 26-V)
4. ホシボシゴミムシ (1 ex 23-VII 田中丸)
5. オオキベリアオゴミムシ (1 ex 22-VII 水上)

6. キボシアオゴミムシ (1 ex 23-VII 水上)
7. オオアトボシアオゴミムシ (3 ex 22-VII 水上)
8. キクビアオアトキリゴミムシ (1 ex 9-VI 安井, 1 ex 23-VII 水上)
9. クロハリアトキリゴミムシ (2 ex 26-V, 2 ex 9-VI, 2 ex 22-VII, 2 ex 23-VII)
10. オオホソクビゴミムシ (6 ex 22-VII 水上)
11. ミイデラゴミムシ (5 ex 23-VII 水上, 3 ex 22-VII 田中丸)

みずすまし科 *Gyrinidae*.

1. ミズスマシ (1 ex 22-VII 酒巻).

はねかくし科 *Staphylinidae*.

1. ウミベアカバハネカクシ (7 ex 22-VII, 10 ex 23-VII)

こがねむし科 *Scarabaeidae*.

1. カドマルエンマコガネ (1 ex 29-VIII, 品川)
2. クロマルエンマコガネ (1 ex 21-VII, 3 ex 22-VII)
3. オオミツノエンマコガネ (3 ex 22-VII, 4 ex 23-VII)
4. オオフタホシマグソコガネ (1 ex 26-V 品川)
5. オオマグソコガネ (7 ex 26-V)
6. ドウガネブイブイ (2 ex 21-VII, 1 ex 22-VII)
7. ヒメコガネ (1 ex 21-VII, 8 ex 22-VII, 7 ex 23-VII)
8. サクラコガネ (1 ex 23-VII 安井)
9. ヒメサクラコガネ (1 ex 21-VII 田中丸)
10. コガネムシ (1 ex 23-VII 安井)
11. スジコガネ (1 ex 22-VII 安井, 1 ex 22-VII 田中丸)
12. マメコガネ (4 ex 22-VII, 5 ex 23-VII)
13. コイチャコガネ (11 ex 26-V, 1 ex 22-VII, 2 ex 23-VII)
14. ウスチャコガネ (6 ex 26-V)
15. オオコフキコガネ (3 ex 23-VII)
16. オオカンショコガネ (1 ex 22-VII 安井, 1 ex 22-VII 酒巻)
17. ヒメハナムグリ (1 ex 26-V 品川)
18. ヒラタハナムグリ (9 ex 26-V, 2 ex 9-VI)
19. カナブン (2 ex 21-VII, 6 ex 22-VII, 1 ex 23-VII)
20. シロテンハナムグリ (4 ex 22-VII).

21. アオハナムグリ (1 ex 26-V. 酒巻, 1 ex 22-VII 安井)

22. コアオハナムグリ (8 ex 26-V. 1 ex 22-VII)

た ま む し 科 *Buprestidae*

1. ウバタマムシ (1 ex 23-VII 安井)

2. クロタマムシ (1 ex 24-VII 柿本)

3. ルイスヒラタチビタマムシ (1 ex 26-V 安井)

こ め つ き む し 科 *Eucnemidae*

1. クシコメツキ (7 ex 26-V. 2 ex 9-VI, 1 ex 21-VII, 3 ex 22-VII)

2. アカアシクシコメツキ (1 ex 26-V, 2 ex 23-VII)

3. ヒラタクシコメツキ (1 ex 9-V 安井)

て ん と う む し 科 *Coccinellidae*

1. ニジウヤホシテントウ (1 ex 21-VII 酒巻)

2. ヒメカメノコテントウ (3 ex 9-VI, 1 ex 21-VII, 2 ex 23-VII)

3. ウスフタモンテントウ (1 ex 26-V 酒巻)

4. テントウムシ (2 ex 26-V)

5. キイロテントウ (1 ex 9-VI 安井)

6. ヒメアカホシテントウ (1 ex 23-VII 安井)

ご ん む し だ ま し 科 *Tenebrionidae*

1. *Gonocephalum* の一種 (1 ex 22-VII, 8 ex 23-VII)

2. *Gonocephalum* の一種 (2 ex 26-V 田中丸)

3. スズビロキマワリモドキ (1 ex 9-VI 安井, 1 ex 22-VII 水上, 1 ex 23-VII 酒巻)

か ん き り も ど き 科 *Oedemeridae*

1. ハイイロカミキリモドキ (1 ex 21-VII, 1 ex 22-VII, 1 ex 23-VII, 1 ex 24-VII)

か ん き り む し 科 *Cerambycidae*

1. キイロミヤマカミキリ (1 ex 26-V 田中丸, 1 ex 23-VII 柿本)

アカメガシワの花 シロダモの花にきているものを採る。

2. *Ceresium* の一種 (2 ex 21-VII 水上, 1 ex 23-VII 田中丸)

カラスウリの花上で採集する。

3. ヨスジトラカミキリ (1 ex 26-V, 5 ex 22-VII, 7 ex 23-VII)

4. タケトラカミキリ (1 ex 26-V, 2 ex 22-VII, 1 ex 23-VII)

5. ホシバカミキリ (2 ex 26-V)

(前頁) ホシベニカミキリはシロダモの花より採集する。

6. センノカミキリ (1 ex 21-VII, 3 ex 23-VII)

タラの木より採集する。

7. ゴマダラカミキリ (1 ex 23-VII 柿本)

8. シロスジカミキリ (1 ex 26-V 安井, 1 ex 9-VI 安井)

9. ウスモンアヤカミキリ (25 ex 26-V, 8 ex 9-VI, 2 ex 21-VII)

10. カノコサビカミキリ (3 ex 22-VII, 2 ex 23-VII)

11. コブスジサビカミキリ (3 ex 26-V, 3 ex 21-VII, 1 ex 22-VII, 3 ex 23-VII)

12. フモンサビカミキリ (17 ex 26-V, 1 ex 9-VI, 6 ex 22-VII,
1 ex 23-VII, 3 ex 29-VIII)

13. アヤモンサビカミキリ(フタカミキリ) (11 ex 26-V, 3 ex 9-VI, 14 ex 21-VII,
17 ex 22-VII, 24 ex 23-VII, 2 ex 29-VIII)

14. イボサビカミキリ (1 ex 22-VII 安井)

は む し 科 *Chrysomelidae*

1. ルリハムシ (2 ex 26-V, 1 ex 9-VI)

2. ヨモギハムシ (6 ex 26-V, 2 ex 9-VI, 1 ex 23-VII)

3. ドウガネサルハムシ (5 ex 26-V, 3 ex 9-VI)

4. オオキイロマルノミハムシ (5 ex 26-V, 1 ex 9-VI)

5. アトボシハムシ (2 ex 26-V, 2 ex 9-VI, 1 ex 23-VII)

6. クロウリハムシ (5 ex 26-V, 1 ex 9-VI, 5 ex 23-VII)

ぞ う む し 科 *Curculionidae*

1. シロコブゾウムシ (1 ex 22-VII 水上)

2. ハスジカツオゾウムシ (3 ex 9-VI 安井, 2 ex 22-VII 水上, 1 ex 23-VII 安井)

3. オオゾウムシ (1 ex 21-VII 水上)

4. オジロアシナガゾウムシ (10 ex 26-V, 1 ex 9-VI, 1 ex 21-VII,
7 ex 22-VII, 9 ex 23-VII)

5. カキゾウムシ (2 ex 26-V 安井,
3 ex 9-VI 安井)

6. マツシラホシゾウムシ (1 ex 26-V, 品川,
1 ex 26-V 安井)



藍島の海藻

一年 其木茂則

藍島は小倉の北約10 kmの海上にあり北岸を対馬海流が流れている。又この島は全体的に岩場が多く、海藻の分布にさまざまな変化が見られた。

ここで昨年採集した海藻との比較、その海藻と水温・水深・生育地との関係を表にしてみた。

海 藻 名	昨年	本年	水深(m)	水温(℃)	生 育 地
ア カ モ ク	○	○	2 ~ 3	27.5	漸深帯
ア ナ ア オ サ	○	○	1 以下	28.5	潮間帯下部
ア ミ ジ ヲ サ	○	○	1 ~ 2		低潮線
ア ラ ×	○	○	2 ~ 3	27.5	低潮線 下
イ ギ ス	○	○	1 以下	28.5	潮間帯
イ ソ ダ ン ツ ウ	○	○	1 以下	28.5	潮間帯
ウ ミ ウ チ ワ	○	○	1 ~ 2	27.5	低潮線 タイドプール
ウ ミ ト ラ ノ オ	○	○	2 ~ 3	27.5	潮間帯
オ オ バ ノ コ ギ リ モ ク	○	○	3 ~ 4	27.0	漸深帯
オ オ バ モ ク	○	○	3 ~ 4	27.0	漸深帯
オ ゴ ノ リ	○	○	1 以下	28.5	潮間帯
ケ イ ギ ス	△	×	1 以下		潮間帯
ユ モ ン ヲ サ	○	○	2 ~ 3	28.0	漸深帯上部
サ ナ ダ ヲ サ	○	○	2 ~ 3	28.0	低潮線
サ メ ズ ヲ サ	○	○	1 ~ 2	28.5	海底の小石
ス ジ ア オ ノ リ	×	○	1 以下	29.0	タイドプール
ソ テ ガ ラ ミ	△	○	1 以下		低潮線
ツ ノ マ タ	○	○	1 ~ 2	28.0	潮間帯

海 藻 名	昨 年	本 年	水深(m)	水温(°C)	生 育 地
ツルシラモ	×	○	1以下	28.5	漸深帯
トゲモク	○	○	3~4	27.0	低潮線
トサカノリ	○	○	2~3	28.0	低潮線 下
ナミノハナ	○	○	1~2	28.0	潮間帯
ナンググサ	○	○	2~3	28.0	低潮線
ネジモク	○	○	3~4	27.5	低潮線 下
ノコギリモク	○	○	3~4	27.5	低潮線 下
ハイミル	○	×	1~2		低潮線
ハナサクラ	○	○	2~3	27.5	低潮線
ヒジキ	○	○	2~3	27.5	潮間帯
フクロミル	○	×	1~2		漸深帯
フジマツモ	○	○	2~3	28.0	潮間帯の高潮線
フタエオオギ	○	○	2~3	27.5	漸深帯
ボタンアオサ	○	△	1以上	28.5	潮間帯の高潮線
ホンダワラ	○	○	3~4	27.0	潮間帯
マキイトグサ	○	×	1以上		潮間帯
マクサ	○	○	2~3	27.5	低潮線
マメタワラ	○	○	3~4	27.5	低潮線
ミル	○	○	1~2	28.5	低潮線
マツマタモク	○	○	2~3	27.5	低潮線 下
ヨレモク	○	○	2~3	27.0	低潮線 下

○ — 多く採集されたもの。
 △ — ほんのわずが採集されたもの。
 × — 全然採集されなかったもの。

※水深・水温は本年度のみ計る。

上の表からもわかるように。

昨年と、今年とを比べて変化のあったものは「ソデガラミ」「ケイズキ」「スジアオノリ」「ツルシラモ」「ハイミル」「フクロミル」「マキイトグサ」などである。

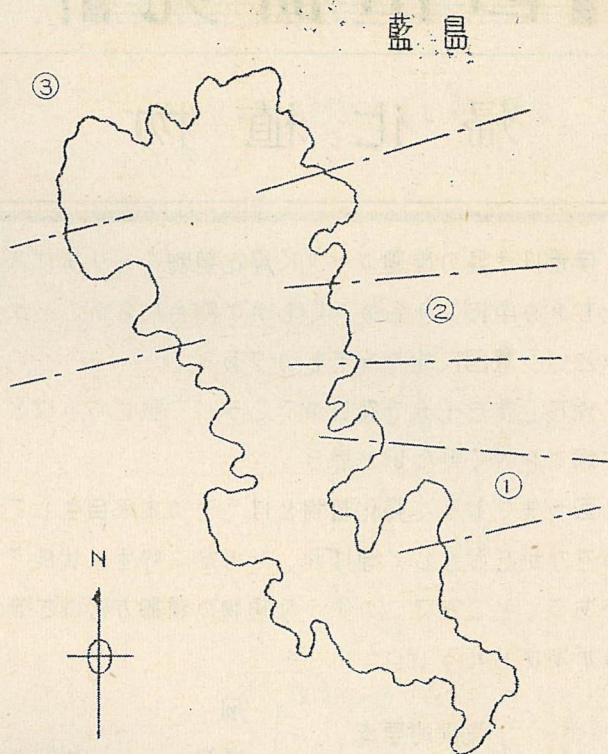
「ケイズキ」は昨年わずかに採集されただけで今年はみつからなかった。「紅藻類」で全体的に短かい毛がはえている。根はあまりはっきりしていない。「スジアオノリ」は「絳藻類」で地図の①③の付近の潮間帯で多く採集することができた。これも根は

はっきりしていない。「ツデガラミ」は「がらがら科」で、すぐ形がこわれやすく標本をつくるのに苦心した。特に①②の低潮線付近で多く採集できた。「シルシラモ」は今年始めてとれたもので「おごのり科」に属し、色はうす緑で、漸深帯に多く分布している。「フクロミル」は「みる科」に属し、色は褐色、漸深帯の相当深いところの岩上に生ずる。「マキイトグサ」は「ふじまつも科」に属し、色は赤茶色で潮間帯に多く分布する。本種は「ウミトラノオ」や「フジマツモ」などの体に着生し、分布としては「北海道東・南・

西岸・表日本北部」などで、藍島で本種が採集できたのは珍しいことではないだろうか。

又、全体的に見て気付いた事は、「アカモク」「オオバノコギリモク」「オオバモク」「トガモク」「ネジモク」「ノコギリモク」「ヤツマタモク」「ヨレモク」「ホンダワラ」などの「ほんだわら科」の海藻は2m~4mの割り合い深い所で取れたこと。又波の荒い所では根の丈夫な物が、波がなくて静かな所では根がはっきりしないものが分布していたこと。又水深1mに達しないような所では緑・紅藻類が多く、水深2m以上の所では、ほとんどが褐藻類であったことなどであった。

今回の採集旅行では4mぐらいまでの分布状態しわからなかったので、来年はもっと深い所の分布状態も調べてみたいと思う。



自由研究

帰化植物

2年 奥松安六

僕は今年の標題の一フに帰化植物をとりあげる事にした。これは今までの採集したものの中にこの名のつくものが割合に多いことから、これを更に深く研究してみようという意図に始まったものである。

現在、まだ十分でないのでこうして載せるのはどうかと思われるが、ごく初歩的な立場で述べてみたいと思う。

言うまでもなく帰化植物とは“その本来自生している地域から他の地域へ、あるものをなかだちとして運ばれ、その地に野生の状態で繁殖している一群の植物”のことである。ところでこのような植物の運搬方法はさまざまであつて、大体次のようなものがあげられる。

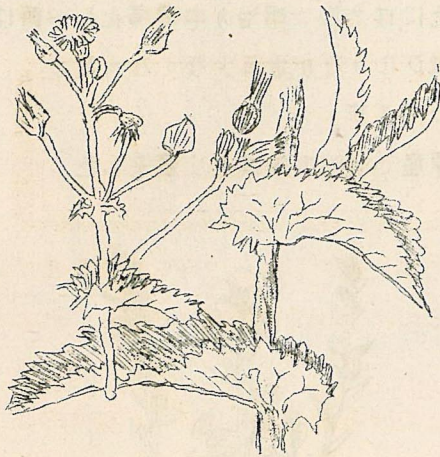
{ 気候的要素	{ 風	{ 海流	{ マシ

中でも、人類による影響は特に大きい。古代から人類によつて植物の移殖が行なわれた例は少なくないが、特に現代のように交通機関が発達すると、一地方の種子が偶然に他の地方にもたらされる事が多い。現在牧草として用いられるクローバは一名シロツメクサといい、徳川時代、オランダとの貿易に際して硝子器具の詰め草(硝子が割れないように中に詰める草)として我が国にもたらされたものである。このように偶然にはいつてきたものとして、他にタチイヌノフグリ、ヘラオオバコ、アレチノギク等があげられる。

また観賞用・薬用・牧草・食用等として輸入されたものが野生化したものもある。

しかし、はいつて来たものが必ずしもそこに帰化するとはかぎらない。それはその気候(温度・湿度・降水量)や土壌、地形等によって制約されるからである。





オニノゲシ

「ノボロギク」

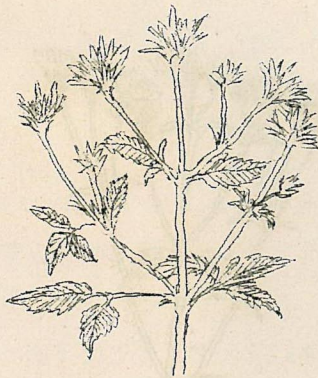
ヨーロッパ原産の越年草、明治の初頃渡来した。

「オオアワダチソウ」

北アメリカから渡来、地下茎でよくふえる。



ノボロギク



アメリカセンダングサ

次に主な帰化植物について述べてみよう。

〔きく科〕

「オニノゲシ」

ヨーロッパ原産、明治の頃日本に帰化、

「ヒナギク」

原産地ヨーロッパ、

「ハルシオン」

北アメリカから渡来、茎の中はからになる。

「アメリカセンダングサ」

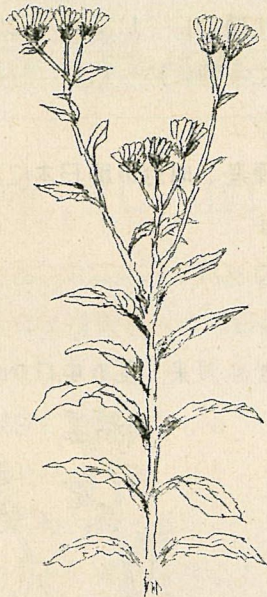
北アメリカ原産、全草をいぶして蚊を退治するのに利用された。

「チチコグサモドキ」

熱帯アメリカ原産、大正中頃渡来、

「ヒメジョオン」

道ばたに多い北米原産の越年草。北米では結石の薬として、もしくは利尿剤として用いられた。



ヒメジョオン

「エリタカアワダチソウ」

北米原産。秋から冬にかけて土手や荒地に群落をつくり黄色の花を咲かせる。

「フジバカマ」

秋の七草の一つ。奈良朝に中国より帰化。

「オオアレチノグサ」

ブラジル原産で日本へは南アジアからはいつた。

「ヘラオオバコ」

以前は門司港付近によく見られたそうだが近年、非常に少なくなっている。原産地ヨーロッパ。

「オオイヌノフグリ」

道ばたに普通な越年草で全体に軟毛がある。日本へは明治初年頃帰化。

「タチイヌノフグリ」

明治の初年頃帰化。道ばたや畑に普通見られる。

「アレチノグサ」

道ばたにはえる。明治の中頃帰化し一時は非常にびこったが近年少なくなった。

「ホウキグサ」

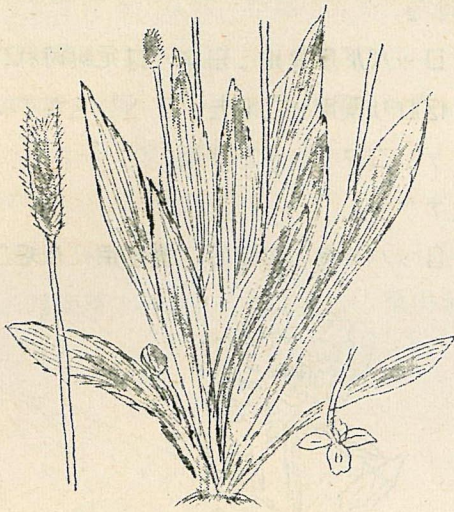
北米原産で明治の中頃より渡来した。



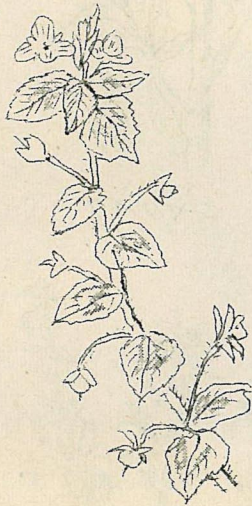
オオアレチノギクバサ



フジバカマ



ヘラオオバコ



オオイヌノフグリ

賞するために輸入された。

「ムラサキツメクサ」

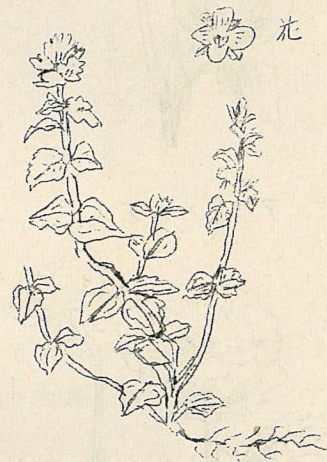
一名アカツメクサともいふ多年草で紅紫色（又は白）の花をつける。ヨーロッパ原産で明治の初めに牧草として栽培される。

「ウマゴヤシ」

道ばたに生える越年草。日本へは徳川時代にはいり今は各地に帰化している。

「ムラサキカタバミ」

畑や庭に生える多年草で地下に褐色の鱗片につつまれた鱗茎があり、多く子球を作って繁殖する。南アメリカ原産。徳川時代、花を



タチヌノフグリ



ムラサキカタバミ



アカツメグサ



ヒナゲシ

「シヤクマク」

中国北部、満州、朝鮮の原産地で根を薬用、花を観賞用とした。日本では平安朝頃から栽培された。徳川時代には多くの園芸品種ができた。

「マンテマ」

ヨーロッパ原産で海岸の砂地や河岸、線路

「ケシ」

ヨーロッパが原産地。日本へは足利時代に津軽に伝わり薬用とされた。アヘンを製す。種子はケシゴマといって食用。

「ヒナゲシ」

ヨーロッパ原産の越年草で観賞用に栽培される。



シヤクマク



マンテマ

などに生える。本州、中国、九州に帰化。

「ハス」

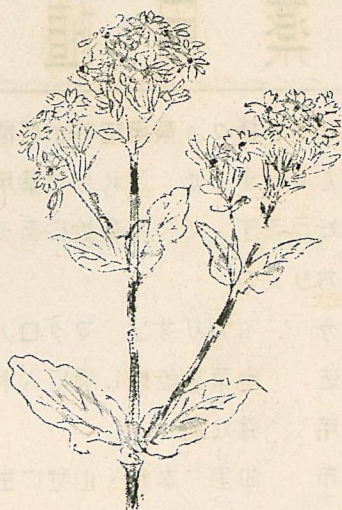
中国、印度、オーストラリアに分布し、日本へは中国より伝来した。

「ムシトリナデシコ」

ヨーロッパ原産で栽培されることもあるが時には海岸の砂地に生えている。徳川末期日本にきた。



ヨウシュヤマゴボウ



ムシトリナデシコ

「ヨーシュヤマゴボウ」

北アメリカが原産地で、果実をポートワイン、菓子、布、紙等を紅色に染めるのに用いる。

「ノゲイトウ」

島や道ばた生える。

「ハゲイトウ」

熱帯アジアの原産で観賞用に栽培される。

以上あげた植物は既に採集済みのものであるが、まだ十分とは言えない。今後も誰が続けてくれる事を希望する。

全体からみて日本に帰化する植物の大半はヨーロッパが占め、南北アメリカがこれに次ぐ。また時代も明治以降が多ことから、前にも述べたように交易による影響は非常に大きい。北九州付近では門司港、めかり付近に多いのもこの事が関係するのではないかとと思われる。

薬 用 植 物

1年 足立 雅子

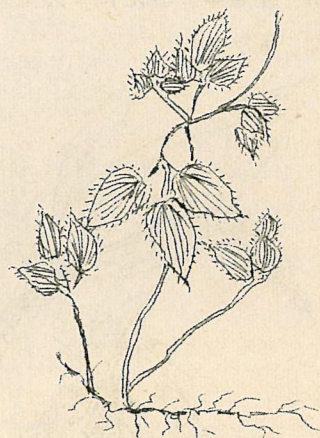
昔から、種々の薬用植物が民間に広く用いられてきました。最近では新薬がずいぶんふえています。これらの薬用植物の中にも、ないがしろにできないもののがかなりあるそうです。そこで身近にある薬用植物について調べてみました。

イカリソウ

- 成 分 イカリオン、マグロノフロリン
 使用法 全草を乾燥し酒に入れて服用
 効 用 強壯剤
 分 布 四国、本州（山地に生える多年草）

オオバコ

- 成 分 アウクビン……全草
 コハク酸・アデニン・コリン……種子
 使用法 全草を陰干ししたものを煎じて服用。
 種子も同様にして用いる。
 効 用 利尿剤、健胃剤、強壯剤
 分 布 日本全度く山野や道ばたに普通にみられる多年草）



イカリソウ

カンゾウ

- 成 分 グリチルリチン、リクイリチン
 使用法 全草を乾燥して薄く煎じたものを甘草湯、
 濃く煎じたものを忘憂湯とよびこれらを
 服用する。
 効 用 甘草湯……のどの痛み、
 忘憂湯……脱肛
 分 布 日本には自生していない。

クコ

- 成 分 ベタイン、コイン、ルチン
 使用法 実を酒に入れて服用。
 根皮を剥離し乾燥して煎じて服用。
 効 用 実……強壯剤 根皮……解熱剤



クコ

分 布 本州、四国、九州（低地に普通にみられる落葉灌木）

ゲンノショウコ

成 分 コハク酸、タンニン、クエルセチン

使用法 葉と茎を乾燥し煎じて服用。

効 用 健胃剤

分 布 北海道、本州、四国、九州（山野や道ばたに普通にみられる多年草）

センブリ

成 分 ゲンチアマリン、オレアノール酸、

使用法 全草を陰干ししたものを煎じて服用。

効 用 強壯剤、強精剤

分 布 北海道、本州、四国、九州

（日当りのよい山地に生える）

ドクダミ

成 分 デカノイル アセトアルデヒド

使用法 全草を風乾し煎じて服用。

効 用 出来物、創傷、血管強化

分 布 本州、四国、九州（山野の木陰や庭の湿地に
多い多年草で悪臭がある）

ヨモギ

成 分 6-アージメチルエスクレチン

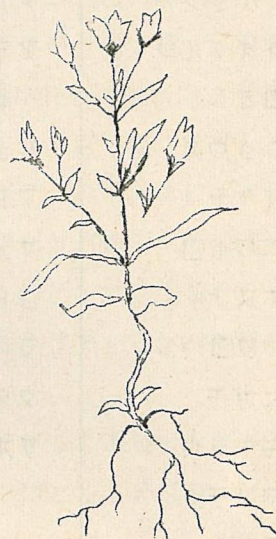
使用法 全草を煎じて乾燥し煎じて服用

効 用 収斂止血剤、消炎剤、解熱剤

分 布 本州、四国、小笠原（山野に普通にある多年草）

その他

植 物 名	成 分	使 用 部 分	効 用
クチナシ	クロシン	果 実	感 冒
ウイキョウ	アネトール	〃	〃
コウホネ	ヌファリシン	根 茎	強壯・止血剤
センキュウ	川芎ラクトン	〃	強壯・鎮静剤
トウキ	アチリジンフタリド	根	〃 〃
フクジュソウ	アドニン	〃	強壯剤



センブリ

オウレン	ベルバリン	根 茎	健胃剤
リンドウ	ゲンチオピクリン	〃	〃
ホウノキ	マグノール	樹 皮	〃
キハダ	ベルバリン	〃	〃
クララ	マトニン	根	〃
ミツガシワ	メリヤチン	葉	〃
サイシン	アサリニン	根 茎	〃
オオグルマ	アラントクラトン	根	健胃・利尿剤
コエンドロ	ベトロセリン	果 実	〃 〃
ショウガ	ショウガタンキ	根 茎	健胃・感冒剤
オケラ	アトラクチロール	〃	健胃・利尿剤
ニワトコ	サンブニグリン	花	健胃・発汗剤
ナズナ	コリン	全 草	健胃・感冒剤
マブコウジ	ラバノン	根	健胃・解熱剤
ニガキ	クワッシン	木 部	健胃剤
キキョウ	サポニン	根	祛痰剤
マツデ	〃	〃	〃
スキナ	エキセトニン	全 草	利尿剤
サイカチ	グレジッチャ サポニン	果実・種子	淋 疾
タラノキ	チーメトキシサリチルアルデヒド	樹 皮	糖尿病
イケマ	キナントコキシン	根	〃
カラシナ	シニグリンミシロン	種 子	リウマチ・神経痛
ナンテン	ドメスチン	果 実	鎮咳・祛痰剤
マオウ	エフェドリン	全 草	〃 〃
クマツヅラ	ベルベナリン	〃	皮膚病・リウマチ
ガ マ	イソラムネチン	花 粉	止血剤
コブシ	チトラール	花 蕾	頭 痛
	ナイゲロール		

有毒植物 (1)

2年 吉生正人

有毒植物とは、特別成分を含み、人や家畜が食用に用いたり触れたりした時、害を与え、又は生命を危くする植物である。有毒植物と薬用植物が毒だとか薬だとか言われるのは使用面から我々が名付けたもので、両者にははっきりした区別はない。



ハシリドコロ

例えば「ハシリドコロ」は初春にみずみずしい若芽を出すので、よく誤って食事に用いられ、狂暴・心搏亢進・視力障害・呼吸静止（死亡）を起こすけれども、この仲間にはアトロピン等のアルカロイドを持つ為、適量に用いられれば鎮痙・鎮痛薬となり、又硫酸アトロピンは散瞳薬となる。

この様な見方をすると日本の有毒植物は200種に近い。

有毒植物は主として有機化合物で、アルカロイド・サポニン・苦味質・その他である。

中毒症状は条件により異なるが、下痢、嘔吐、呼吸困難、脈乱などである。

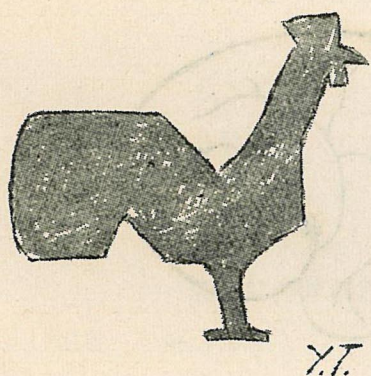
治療は体内の毒物を除くこと（胃洗滌、下剤、吐剤の使用）が第一で、その次に

毒成分を化学的に無毒化する（例えば「青酸中毒に対して5%次亜硫酸ソーダ」）ことが必要である。又消化管内の毒物を沈降させ、溶解や吸収が困難な化合物を形成させる（タンニン酸、重曹水による）のも必要である。又それだけでなく中毒で生じた症状に対し、呼吸興奮（硫酸アトロピン・カンフル・人工呼吸・アルコール服用）、心臓血管神経興奮（カンフル・アルコール・茶服用・ジギタリス剤）を起させることも大切である。

有 毒 植 物 (2) 2 年 青 生 正 人

科 名	種 名	毒となる部分	有 毒 成 分	症 状 及 び 特 徴
スイカズラ	キンギンボク	果 実	未 詳	嘔吐・下痢
ゴマノハグサ	ジギタリス	葉	ジギトキシシン ギトキシシン	心 臓 毒
ナ ス	イヌホオズキ	全 草	ソラニン	強い毒性
	ヒヨドリジョウゴ	〃	〃	〃
	タ バ コ	葉	ニコチン ニコチュイン	神経毒・呼吸麻痺
	チョウセンアサガオ	〃	アトロピン ヒョスチアミン	中枢神経麻痺
	ハシリドコロ	全 草	スコポラミン	〃
シャクナゲ	ア セ ビ	葉	アンドロメドキシシン	呼吸中枢麻痺
セ リ	ドクゼリ	全草とくに根	チクトキシシン	痙 攣 毒
	オニバシリ	樹皮・果実	未 詳	皮膚・胃腸炎症
ウ ル シ	ウ ル シ	全草とくに液汁	ウルシオール ヒドロウルシオール	皮膚の炎症
	ハゼノキ	〃	〃	〃
タカトウダイ	トウダイグサ	全 草	未 詳	胃 腸 炎
	ナツトウダイ	〃	〃	〃
サ ク ラ	ウ メ	未熟種子	アミグダリンシアン酸	青酸中毒
	モ モ	〃	〃	〃
ケ シ	キケマン	全 草	プロトピン	無感覚・麻痺作用
	タケニグサ	〃	〃	麻痺作用
	ケ シ	未熟果の滲出物	ピルシン系アルカロイド	中枢神経麻痺
ウマノアシガタ	キツネノボタン	全 草	〃	金泥・胃腸炎・腎臓炎
	キンボウゲ	〃	〃	〃
	センニンソウ	〃	〃	〃
	トリカブト	〃	ヒパコニチン アニコニチン メサコニチン	神経中枢特に 呼吸中枢麻痺

ヒガンバナ	ヒガンバナ	全草とくに球根	デキサニン リコラミン	嘔吐・胃腸
	キツネノカミソリ	〃	リコリン	〃
ユリ	バイケイソウ	根	プロトバトラリン エルビン	神経中枢特に 呼吸中枢麻痺
	シュロソウ	〃	〃	〃
テンナンショウ	クワズイモ	根 茎	未 詳	辛辣性格
	テンナンショウ	〃	〃	〃
	マムシクサ	〃	〃	〃
オモダカ	サシオモダカ	〃	〃	皮膚発泡



鶏の発生

1年 田 原 洋 一

鶏は発生を観察するのに最も適当だと聞いた。なぜなら卵が大きく、又簡単に手に入るからだ。しかし難しい所やわからなかった所はたくさんあったがそれらは参考書を見たり、三年生から

聞いて観察を進めていった。初めのうちはいろいろな不手際から、標本もとれず、又どれくらい発生が進んでいるかよくわからなかった。日曜日やその他の休日には観察する時間が異なったり卵を回転させる事をわすれて、一時はどうなることかと心配した。

下記にかかげることは観察と名のつくものではありませんが、一応観察結果として報告します。

器具 電気定温器 (常時 30°C に保つ)
シャーレ 40 組
ピンセット
ピペット

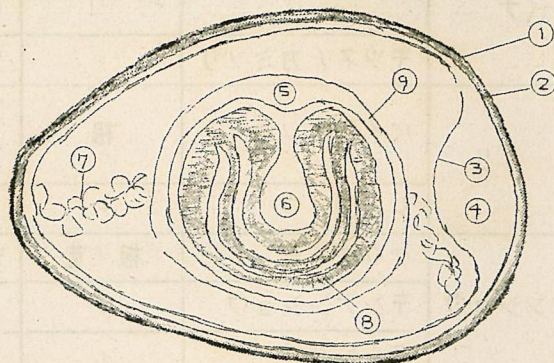
材料 白色レグホン種卵 40 個

その他 — ホルマリン (10% 液)

クレゾール

白色レグホン種卵 (fig-1)

1. 卵殻
2. 卵殻膜の外層
3. 卵殻膜の内層
4. 気房
5. 胚盤
6. 白色卵黄
7. からざ



{ fig - 1 }

8. 黄色卵黄
9. 卵黄膜

〔観察結果〕

。1日目 胚盤の形成 (fig-2)

血管が少し出来る

。4日目 胚の形がはっきりしてくる。

眼胚が出来る

心臓の鼓動 1分間78回

。5日目 胚の形態

尾がある

脳の形成が始まる。

眼球の形がわかる (fig-2) 胚盤の状態

翼、足となる所に突起が出来る。

脊椎の形がわかる

。6日目 胚の形態

尾がしだいに太く短くなっていくのがわかる。

頭部昨日より著しく発達しているのがわかる。

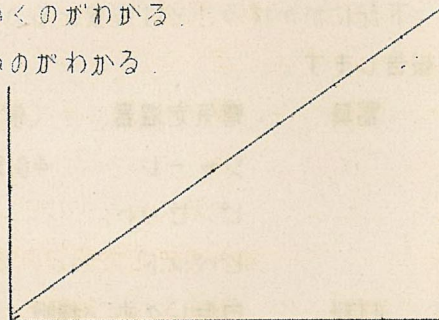
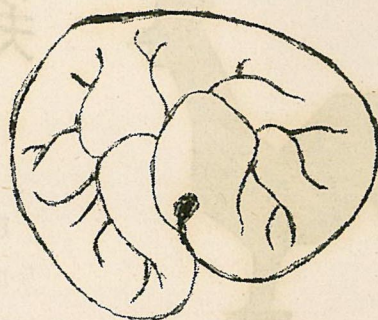
頭部の大きさ 体長の約 $\frac{1}{2}$

。7日目 胚の形態

足 ---- 6 mm

翼 ---- 4 mm

尾 ---- 5 mm



昨日に比べて足、翼がよく発達した。

頭部に^{くち}嘴になるらしい所に凹地が出来る

。8日目 胚の形態

足 ---- 10.5 mm

翼 ---- 8 mm

昨日に引き続いて足、翼の成長が著しい

足に指の原形らしい凸地が出来る

。9日目 胚の形態

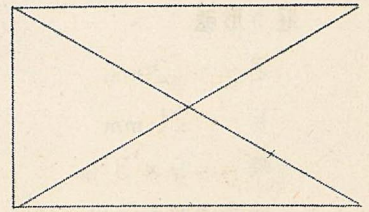
足 ---- 9 mm

翼 ---- 9.5 mm

また尾がかすかにある

耳の出来るらしい所に凹地がある

(足が前日より短かくなっていますが、これは卵の大きさがちがうからです。)



。10日目 胚の形態

足 ---- 11 mm

翼 ---- 10 mm

頭部に血管が走るようになる

。11日目 胚の形態

足 ---- 13 mm

翼 ---- 12 mm

嘴 ---- 2×2 mm (横 $\times$ 縦)

成長の速さが昨日に比べておそい。

皮膚に凸地がたくさん出来る。羽毛のはえる所らしい。

。12日目 胚の形態

足 ---- 26 mm

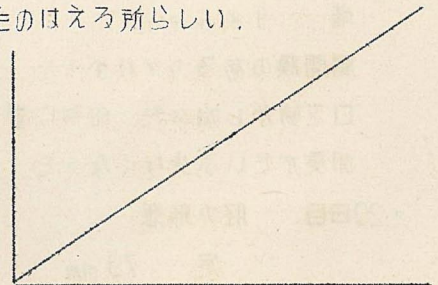
翼 ---- 17 mm

嘴 ---- 6×3 mm

非常に成長がはげしいが、これは

卵の大きさが前日のよりも大きかったことも原因のようだ。

羽毛がはえ始めた。特に翼、足にフメが出来る。



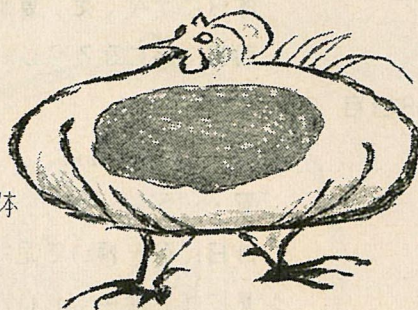
。13日目 胚の形態

足 --- 31 mm

翼 --- 20 mm

嘴 --- 8×3 mm

特によく発達した所はなく、全体としてやや大きくなる



。14日目

胚の形態

足 --- 32 mm

翼 --- 21 mm

嘴 --- 9×3 mm

頭部に羽毛がはえ始める

成長の速度がおそくなる

。15日目

胚の形態

足 --- 33 mm

翼 --- 22 mm

嘴 --- 9×4 mm

前日より全体的に大きくなる

。16日目

胚の形態

足 ---

翼 --- 31 mm

嘴 --- 9.5×4 mm

羽毛がだいぶのびた

。17日目

胚の形態

足 --- 41 mm

翼 --- 36 mm

嘴 --- 11.5×4.5 mm

だいぶひよこらしくなった

。18日目

胚の形態

足 --- 57 mm

翼 --- 43.5 mm

嘴 --- 9×5 mm

腸間膜のあるのがわかった

口を動かし始めた。卵殻に糞がついていた。糞が前日より多くなっている。

卵黄がだいぶ少なくなった。

。19日目

胚の形態

足 --- 48

翼 --- 34

嘴 --- 10×4.5 mm

とさかが出来ている。

。20日目 胚の形態

足 --- 79 mm

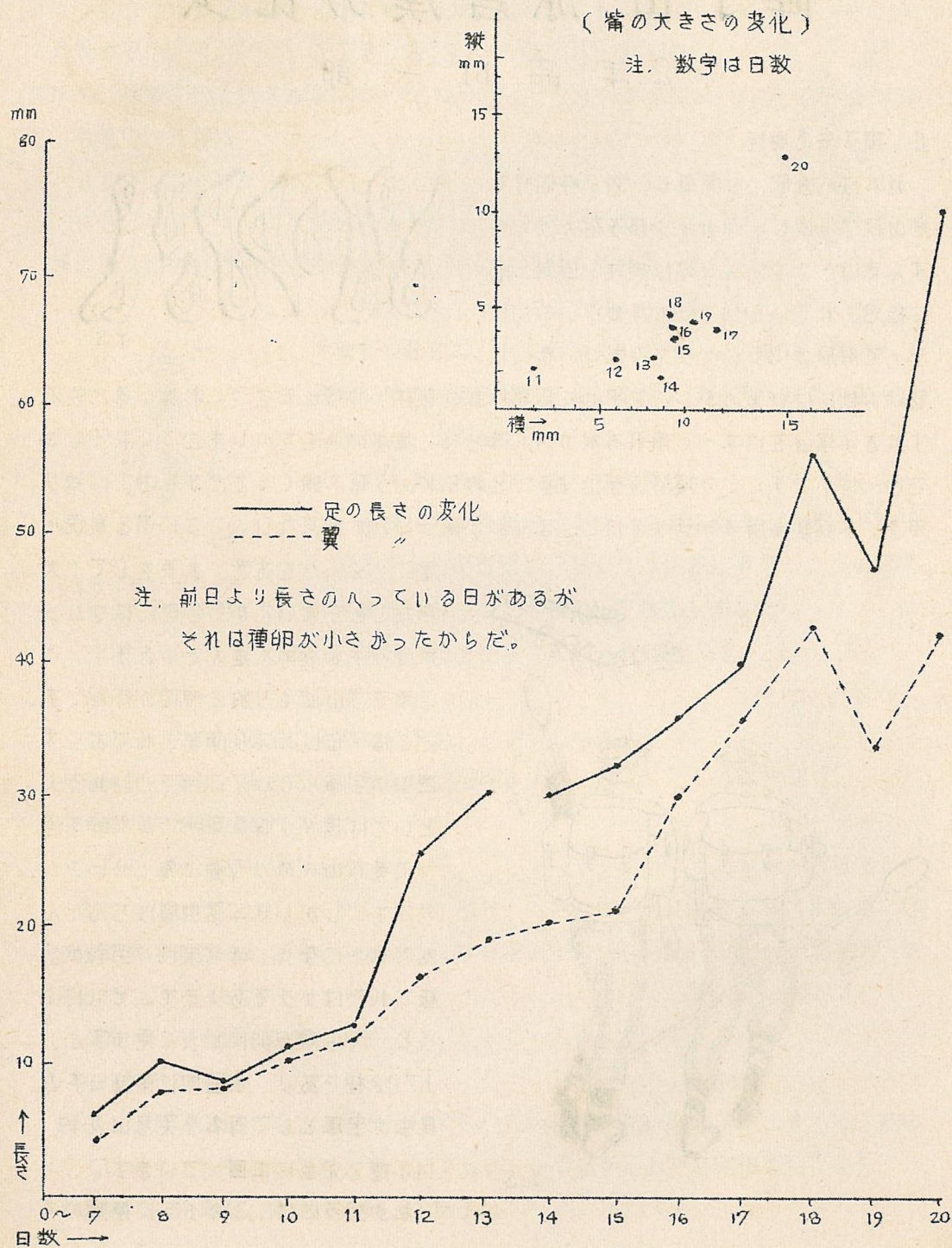
翼 --- 38 mm

嘴 --- 15×13 mm

口、嘴、足をしきりに動かしている

卵黄の近くが体内に入る

(足・翼の長さの変化)



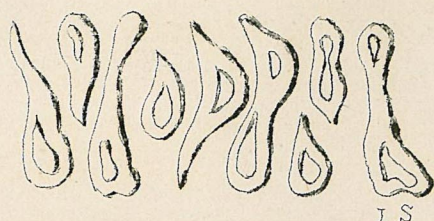
障子岳、深倉溪の昆虫

2 年 品 川 一 郎

Ⅱ. 障子岳の概況

我々は小倉駅より乗車し、約2時間経て彦山駅で下車し、深倉から障子岳の方へすすんでいきます。深倉溪は現在、国定公園に指定されている所でその景観は、谷川にそって屏風のようにそびえる岩々、春には

新緑の秋には紅葉の美しさを見せる落葉樹林の森林、沛然と天をつく杉林、暑さをかすれさす溪谷をけずって流れる水の流れなどで、我々の心をたのしませてくれるものでいっぱいです。この溪谷を登山すること約5 Km、草木峠(くさぎがたお)に致します。木材運搬用のトラックはここまでしか来ることが出来ない。ここにある炭焼小



I.S



I.S

屋にリュックを置き、武装をじて大きなことを書いたが、ここにはマムシがでる谷の中へ進んでいきます。ここまで彦山駅より約2時間の行程です。ここ障子岳はあまり開発されておらず昆虫の宝庫ともいえる所で、訪れる人といえば鳩が、採集家が、草木峠を越えて英彦山へぬける登山家くらいのもので。しかし近年昆虫層はだんだんあきらかになり、昨年末に、目録が出版されたばかりであります。それによると、天牛類を例にとって見ますと、170余種であり、全国的に南部日本の昆虫の宝庫として有名な英彦山の約140種を完全に上回っています。

私が思うには、このように種類が多

いのは昆虫にとって非常にたいせつな山地性の花（ミズキ、リョウブなど）が数多くあること、伐採が広く行なわれていること、木の種類が多いこと、気候にめぐまれていること、土壌が豊かなことなどが主な原因だと思います。

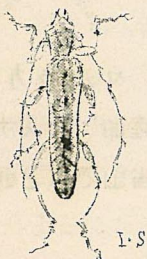
我々はⅦ18, Ⅶ29.30, Ⅷ7.8, Ⅷ20.21, Ⅸ7.8, Ⅹ20 にわたって採集を行ないました。

2. 特筆すべき昆虫

① ルリボシカミキリ

本種は非常に美しく変種が数種あり、7～9月に出現し、近畿以西では四国の山地を除き少なく、当山は何処の産地よりも多く採集されています。エゴノキの薪

や樹皮に産卵し、カエデ類クルミ類に飛来します。当山では三頭とも薪上にて採集しました（分布……日本全土）

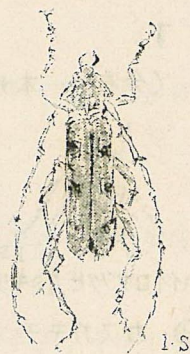


タキグチモモフトホリ
カミキリ

② タキグチモモフトホソカミキリ

東洋地方の特産種であり、日本は分布の北限にあたります。7月頃出限し、リョウブの花に飛来し、当山ではアオモリショウマの花上にて採集しました。

（分布……本州（紀伊半島）、四国、九州）



ルリボシカミキリ

③ ツチイロフトヒゲカミキリ

本種は、九州、四国に分布しますが、めずらしい種で5～7月頃出現します。当山では叩き網で2頭採集しました。

（分布……四国、九州）

④ ムツモンミツギリゾウムシ

ミツギリゾウムシに、一見似るが小型で、上翅の中央前に黄紋がありません。朽木の樹皮下に棲息します。九州では少ない種で、今回は薪上に静止しているのを採集しました。

（分布……北海道、本州、九州）

⑤ ホソトラカミキリ

6～8月頃山地の花上、薪上に飛来し、九州では少ない種ではありますが、当山にては数多く採集されています。アオモリショウマの花上で2頭採集しました。

（分布……北海道、本州、四国、九州）

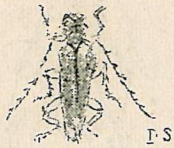
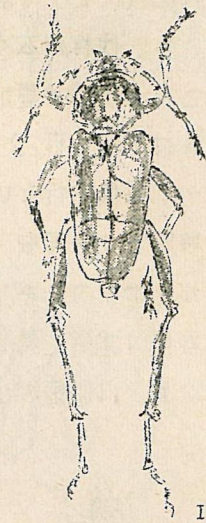


ツチイロフトヒゲカミキリ

⑥ ヤノトラカミキリ

7～8項に出現する山地性の大型トラカミキリで、当山では、エノキより6頭採集しました。エノキに飛来するようです。

(分布……本州、九州、北支那)



⑦ ハイイロツツクビカミキリ

一属一種のめずらしい種で当山にて叩き網で一頭採集しました。

ハイイロツツクビカミキリ (分布……北海道、本州、九州)

⑧ カスガキモンカミキリ

キモンカミキリより一級と黄紋が大きく、やや少ない種で



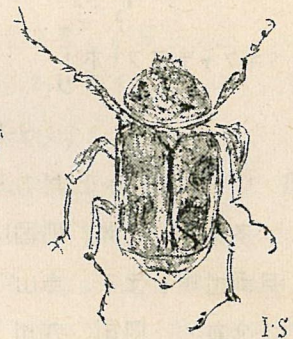
あります。7～8月頃成虫は、コナラ、ミズナラ、ホホノキの伐採木にあつまります。産卵、ミズナラでは成虫となって羽化脱出が確認されています。当山では2頭採集しました。

カスガキモンカミキリ (分布……本州、四国、九州)

⑨ オオヒラタハナムグリ

本種は7～8月頃、雄は山地の花上、雌は山地の朽木で採集される少ない種で当山で一頭、ソダで採集しました。

(分布……北海道、本州、九州、朝鮮)



⑩ エゾサビカミキリ

⑪ ヒメアヤモンチビカミキリ

上二種は、粗朶上で、普通種にまじって採集されました。

⑫ トラフコメツキ

本種は個体変異が多く、一名ヨツボシヒラタコメツキともいいます。当山では、早春叩き網で二頭採集しました。

(分布……本州、四国、九州)

⑬ ハスジヒゲナガゾウ

⑭ Ceresium

粗朶にて数頭採集され、体毛色もそれぞれ黒褐色から明褐色まで変化にとんでいます。ヨコヤマヒメカミキリ、リュウキュウヒメカミキリよりはるかに小型です。

⑮ キボシチビカミキリ

本種は障子岳新記録種で粗朶上で採集されました。

③. 今年度特に力を入れた腐肉採集の成果

① 平地性と山地性の比較

私達は魚肉を障子岳にもっていき、条件を異にした場所を選んで数ヶ所にしかけ、周期的に見てまわり、集まっている昆虫を採集しました。

採集した昆虫には次のものがあげられます。

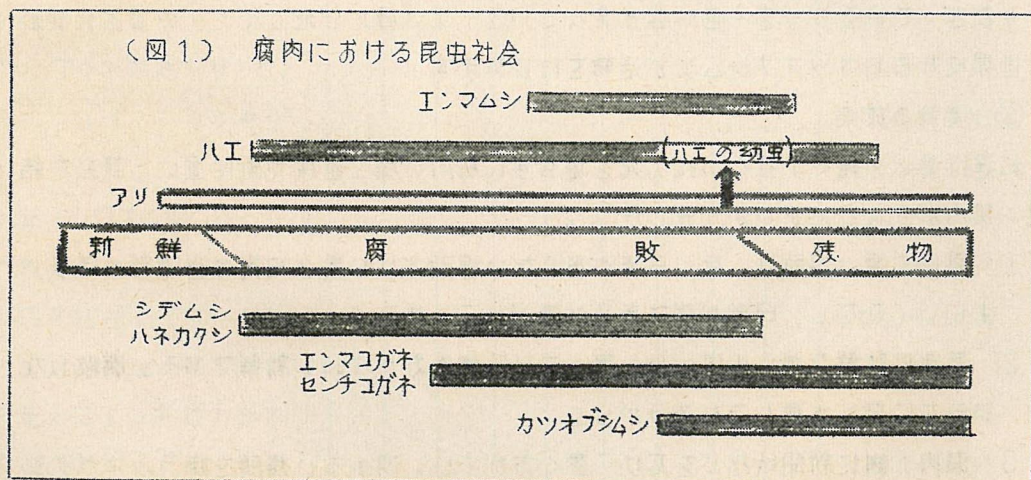
〔クロシデムシ、コクロシデムシ、ヨツボシモンシデムシ、クロマルエンコガネ〕
〔コブマルエンマコガネ、センチコガネ、センチコガネ〕

これは平地で行なった腐肉採集の結果と比較すると興味深いものです。平地の採集場所は、和布利公園、足立山麓、藍島などですが、採集した昆虫をあげると、

〔オオヒラタシデムシ、バツコウヒラタシデムシ、モモフトシデムシ〕
〔ヒメヒラタシデムシ、ウミベアカハネカクシ、アカバハネカクシ〕
〔ネビロハネカクシ、オオアカバコガシラハネカクシ、ママトエンマムシ〕
〔ルリエンマムシ、センチコガネ、カドマルエンマコガネ〕
〔オオミツノエンマコガネ、コブマルエンマコガネ〕

などで、山地性のシデムシは硬く、金属的な光沢があり、平地性のシデムシは光沢がなく、縦状に溝があります。ハネカクシ類は山地では期待したほどあつまりませんでした。エンマムシ類も障子岳では採集できませんでした。

② 集来する順序



数回行なった結果、集来する順序が種類別にほぼきまっていて、彼ら同志には天敵

関係があるようです。上図の説明をしますと。まずアリ類がやってきます。このことは夏、地表を見ると網の目のようにアリが歩きまわっていることから、うなずける事だと思います。次にハエが、どこからともなく飛んできます。彼女らは腐肉にたいいて産卵します。ウジによってどろどろにされない新鮮なうちにシテムシが歩いてきます。(遠くであれば飛んできるとは思いますが、僕が見たのは触角を動かしながら、いそいで歩いてくるものばかりでした。だから僕の想像では、近くの地奥に着地してそこからあるいてくるものだと思います。)腐肉が完全に腐敗するとシテムシのあつまる頭数は減りました。また甲虫類では、シテムシが最も早くあつまることになります。これはシテムシの触角になにか関係があると思います。事実、シテムシの触角は、他と異って先端が丸くなって太くなっています。ハネカクシ類も、シテムシ類におとらず早く集まってきます。

アリは新鮮なうちは肉片をくわえて、いそいそと働いていますが、腐敗すると産卵されたハエの卵が幼虫になるので、ウジを運び始めます。ウジによって肉は溶かされスープのようになるので、そこにおぼれるアリもでてくるほどです。ウジは肉を溶かす液体(消化液らしいもの)を分泌しているようです。なぜならば彼らの口器は噛むようにはできていませんし、ハエの集まることのできない肉はそのまま日光によって乾燥してしまふからです。エンマコガネ、センチコガネは、肉がハエのウジによってできたスープが地下にしみこんで地上に骨のみが残っているとき、地下の浅い所でうごめいています。多い時には地表が動くほどです。しばらくするとエンマムシが集まってきます。(まだ早く飛来してきた事もありましたが)彼らはパンパンに肥えて、油みなぎっているウジを一匹一匹と食べていきます。骨だけ地上にとりのこされ静かな世界になるとカツオブシムシが活動をはじめます。

③ 実験の成果

私達は臭いを強くするために、穴を掘らずに腐肉の塊を直接地面に置いて試みた結果、次のようなことがわかりました。

1. 腐肉を置く場所は、全く日光の当たらない場所よりも幾分日光の当る所のほうがよい。(ただし、日光が強すぎると乾燥してしまふ)
2. あまり新鮮な物よりは、少し腐っている物の方がよい。新鮮であると腐敗しないうちにアリが運んでしまふから。
3. 腐肉の側に新聞紙などを広げて置く方がよい。明かるい場所を嫌うハネカクシ類やエンマコガネ類がその下に集まるので。

4. 障子岳産天牛類の最盛期

今回は当山にて天牛類を110種採集しましたが、生育期間をはっきりさせるため5頭以上採集したものだけにしぼりました。

(表1) 障子岳産カミキリの最盛期										
種名	5/19	6/29	6/30	7/6	7/7	7/21	8/7	8/8	10/20	最盛期
クロカミキリ				5						7月上旬
ツシマムクボカミキリ		2		4				3		6月～8月
ホソカミキリ		1		5	7			8		7月～8月
フタオビノミハナカミキリ	12									5月上旬
ツマグロハナカミリ	5				2					5月～7月
ウスイロトラカミキリ	1			1	5	1				7月上旬
ニイジマトラカミキリ						1	3	4		8月上旬
フタオビミドリトラカミキリ					1	4	5	1		7月上旬～8月上旬
エグリトラカミキリ				12	7	1				7月上旬
マノトラカミキリ						5				7月下旬
ヒゲナガゴフ"ヤハズ"カミキリ	2	3								5月～8月
ヒメヒゲナガカミキリ		5		5	3	1	3	2		7月～8月
ビロウドカミキリ		8		10		3	39			8月上旬
ニセビロウドカミキリ		2	1	8			3			7月上旬
ヤハズカミキリ		1				3		3		6月～8月
ナガゴ"マフ"カミキリ		1		1	1		6	1		6月～8月
カタジロゴマフカミキリ						3		2		7月下旬～8月上旬
アトジロサビカミキリ				1	1	3	1			7月下旬
トガリシロオビサビカミキリ					5	1	3			7月～8月
アトモンサビカミキリ	2				3					5月～7月
シロオビゴマフカミキリ					17	5	3	3		7月～8月
ヒシカミキリ					4	1				7月上旬
クモノスモンサビカミキリ	1				2		3		2	5月～10月
ドイカミキリ	1								7	5月～10月
イボタサビカミキリ					2	1	2	1		7月～8月

トゲバカミキリ					3		2	6		7月 ~ 8月
クモガタケシカミキリ					1		15	19		8月上旬
アトモンマルケシカミキリ					21	6	8	14		7月 ~ 8月
ツラオビゴマフケシカミキリ					4		2	5		7月 ~ 8月

(表2) 花 の 開 花 時 期										
花 名	花 色	Ⅳ			Ⅴ			Ⅵ		
		上	中	下	上	中	下	上	中	下
カエデ										
サンショウ	黄									
ノバラ	黄、白									
クマシデ	黄									
キイチゴ	黄、白									
ゴマキ	白									
シイ	黄									
ミズキ	白									
クリ	黄									
アカメガシワ	黄									
アホモリショウマ	白									
タラノキ	黄									
ネム	淡 黄									
リョウブ	白									

〔表の説明〕

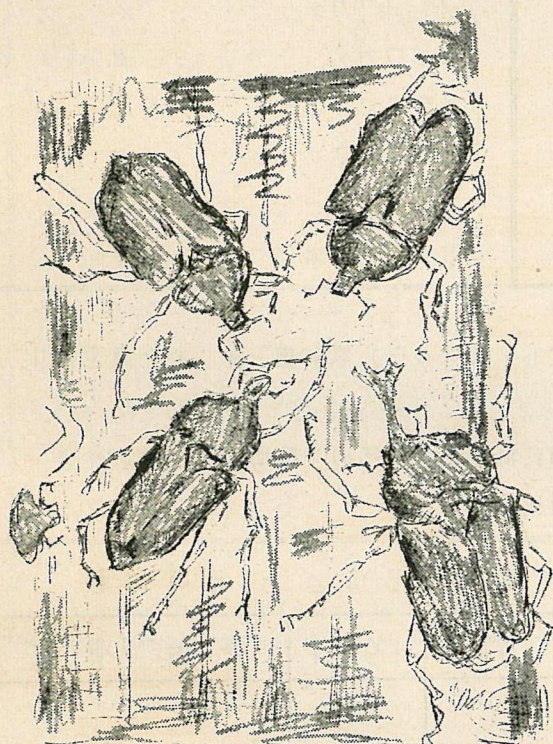
まずクロカミリ、ツマムナクボカミリ、ホソカミリですが、彼らは食物が針葉樹系の倒木または衰弱木であるので時期に追われることがなく生育期間が長いです。

Pidonia 類では、表2と比較してわかるように花の開化時期と最盛期とが一致しています。

トラカミリ類は、全般的に7月~8月まで多種生育し、アホモリショウマ、リョウブの花上に集まったり、産卵のためソダに集まります。ヒケナガコブヤハズカミキ

りは、最盛期とははっきり言うことはできませんが、生棲期間は非常に長く4月下旬～8月頃まで生棲するようです。(不幸にして昨年は春期しか採集できませんでした。)

夜間採集によって多数採集される、ヒメヒゲナガカミリ、ビロウドカミキリ、ニセビロウドカミキリは7月上旬～8月下旬まで生棲します。



I・S

サビカミキリ類は、ハナカミキリ類のように花の開花時期に左右されず、食草木となるソダが年中あるので、生棲期間が長いです。

特にドイカミカリ、クモノスモンサビカミキリは長く5月～10月まで生棲します。

クシカミキリ類は7月～8月に限られています。

5. クワガタムシ科、コガネムシ科の'63と'61との比較

これらの増減には、原因の判明しているものだけをのせました。

(表3) 1963, 61 年度 クワガタムシ科 & コガネムシ科、障子岳採集比較			
種 名	1963	1961	
I. 糖 密 採 集 の 成 果			
カブトムシ	6	0	
			アオカナラン 4 : 6
			シロテンハナムグリ 1 : 0
			ミヤマクワガタ 2 : 0

スジクワガタ	2 : 0	ヒゲナガビロウドコガネ	0 : 2
コクワガタ	2 : 0	Ⅲ. 腐肉採集の成果	
アカアシクワガタ	1 : 0	センチコガネ	2 : 0
Ⅱ. 食樹発見の成果		クロマルエンマコガネ	5 : 0
アオハナムグリ	14 : 4	Ⅳ. 夜間採集の成果	
クロハナムグリ	3 : 1	カブトムシ	5 : 0
ヒメアシナガコガネ	2 : 0	ノコギリクワガタ	3 : 1
オオヒラタハナムグリ	1 : 0	ミヤマクワガタ	1 : 0
クロアシナガコガネ	3 : 0	スジクワガタ	4 : 1
ジュウヒシホシハナムグリ	1 : 0	コクワガタ	4 : 1
ハイロビロウドコガネ	1 : 0	ヒラタクワガタ	2 : 0
クロスジチャイロコガネ	1 : 0	ツヤコガネ	7 : 0
タケムラスジコガネ	3 : 0	スジコガネ	3 : 0
ウスチャイロコガネ	1 : 0	サクラコガネ	6 : 0

① 糖蜜採集の成果としては、クヌギにしょうちゅうと黒砂糖を煮つめた液をぬり、夜間8～10時の間見てまわりました。

② 夜間採集の成果としては、民家の灯に飛来してくるのを採集しました。

⑥ 障子岳産天牛類の'63年と'61年の比較

(表4) 障子岳産天牛類の'63年と'61年の比較			
カミキリムシ名	1963	1961	食樹、食草
花の満開期に会う			
フタオビノミハナカミキリ	1/2	0	ミズキ、カエデ
ツマグロハナカミキリ	7	0	ミズキ、カエデ
昆虫の最盛期に会う			
オオヒメハナカミキリ	2	7	ミズキ
個体数の減少			
ウスイロトラカミキリ	8	35	ツラカシ、サカキ
			ウラジロガシ
キスジトラカミキリ	4	20	ヤマハンノキ、ケヤキ

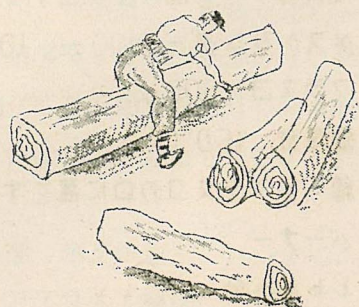
クビアカトラカミキリ	2	14	エゾイタヤ ヤチグモ
夜間採集の成果			
ホソカミキリ	15	4	トドマツ、アカマツ クヌギ
クロカミキリ	2	7	マツ類
ビロウドカミキリ	64	8	アカマツ
ニセビロウドカミキリ	14	8	ノリウツギ、シラカシ ヤツデ
好伐採地にめぐまる			
シロオビゴマフカミキリ	28	8	ケマキ
クモノスモンサビカミキリ	8	1	セチダモ、オヒョウ
ドイカミキリ	8	2	セチダモ、オヒョウ
クモガタケシカミキリ	35	3	カシワ、フジ、ミズキ
アトモンマルケシカミキリ	45	19	アカメガシワ、ツブラジイ エゴノキ
シラオビゴマフケシカミキリ	11	1	フジ
食樹の確認			
ヤノトラカミキリ	6	1	エノキ
マハズカミキリ	6	0	ネムノキ、マブカラシ
シラホシカミキリ	2	9	オニグルミ、サワグルミ

① 花の満開期

花の満開期に合い、フタオビノミハナ、ツマ
グロハナカミキリを採集しましたが、オオヒメ
ハナカミキリは不順にも最盛期にあわなかった
ため減少しています。

② 個体数の減少

トラカミキリ類が、伐採もよく行われていた
のに全体的に減少しているのは個体数の減少が
最も主な原因であらう。



③ 夜間採集の成果

夜間に倒木を見てあるき、一昨年より増加しました。

④ 好伐採地にめぐまる

このためサビカミキリ類、ケシカミキリ類が増加しました。

食樹の発見

ヤノトラカミキリはエノキに飛来するのを採集しました。



2年 岡本清美

1年 筒井昭代

「暮らしの手帖'65」に私達の大好きなアイスクリームに含まれている大腸菌について検査したものがありませんでしたので、いつも食べているアイスクリームでもあるし、保温器等の実験器具がありましたので、夏休みの研究課題としてこれを取りあげました。「暮らしの手帖」では10円のアイスクリームにしぼって調査していましたが、私達は一寸方針をかえてメーカー毎に調べることにし、Mo, S, Me, G, R, F社を検査しました。

準備器具

- | | | |
|---------|-------------------------------|------------------|
| シャーレ | (調べようとするクリーム数×3)個 | } 高温(150℃)殺菌済のもの |
| ピペット | (調べようとするクリームの数) | |
| 攪拌棒 | (調べようとするクリーム数+2)個 | |
| メスシリンダー | 100 cc, 10 cc | |
| フラスコ | 500 cc | |
| 温度計 | 150℃ | |
| 綿 | (フラスコの口に蓋をする。使用する直前、火であぶって消毒) | |
| バーナー | | |
| レトルト台 | | |

金網

湯煎鍋

材料 デスオキシコレート培地

アイスクリーム

方法 (推定試験)

- (1) アイスクリームを液状にしたものをシャーレの中に入れる。
- (2) 培地を使用量だけ取って、それを蒸留水中に加える。
- (3) ②を90°C～100°Cの状態まで熱し、この状態で2～3分づいたのを45°Cまで冷やす。
- (4) ①のシャーレの材料をとって(1ccずつ)それを別のシャーレ(3個)に入れる。
〔材料を遅くするのは1ccなので水分が蒸発してしまうからです。シャーレ〕
〔3個にとるのは1個だと不正確なので、正確度を高めるためです。〕
- (5) ④で作った材料を15cc ずつシャーレに分注。入れたあとシャーレの蓋に液がつかないように注意して材料を均等にするためシャーレを回す。
〔この時フラスコに入れている培地が固まってしまうように45°C～46°C〕
〔位の湯をバケツに入れて、使用しないときは、培地をその中に入れ、固まらせないように気をつける。〕
- (6) ⑤が固まったら、さらに5cc入れ、素早くシャーレを回す。
(5ccなので素早くしないと一ところに固まってしまう)
- (7) ⑥が固まったら、40°C位の温度で18～22 時間培養し、その結果を見る。

結果をみて赤い斑臭となって大腸菌が現われたもの(推定試験陽性)についてガス発酵法を実施する。

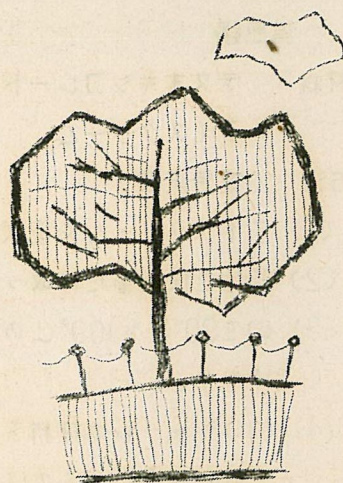
このガス発酵法は経費、器具などいろいろな面からみて今年は出来なかったが、来年度に二年生に譲ることとし、次に方法を記しておく。

推定試験陽性のものについてガス発酵する。E, M, B培養基に塗抹し35°C～37°Cの温度で22～26時間培養した後、大腸菌群の定型的集落(定型的集落がない場合は定型的集落に類似した集落2以上)を釣菌して乳糖ブイヨン培発酵管及び寒天斜面にそれぞれ移殖する。(定型的集落に類似した集落を釣菌した場合は各集落から釣菌したものに別にそれぞれ移殖する。)

乳糖ブイヨン発酵管は35°C～37°Cの45～51 時間、寒天斜面35°C～39°Cの温度で24時間培養し、乳糖ブイヨン発酵管において、ガス発生を確認した場合に、これ

と相対する寒天斜面培養について検鏡し、グラム陰性無芽胞桿菌を認めた場合を大腸菌群陽性とする。

※ 小倉保健所へ行って聞いたところによりますと、推定試験の際、陽性と出ても、他の雑菌がいなかったら、大体大腸菌群陽性とガス発酵法でも出ないようですとのことでした。



結果 培養時間20時間に統一

- 8/8 (1) 30円M₀ アイスクリーム 紙カップ
 (2) 30円M₀ シャーベット 紙カップ
 (3) 10円M₀ アイスクリーム 紙カップ
 (4) 10円Fアイスヨーカン 紙(下請け)
 (5) 5円Fアイスパイン ビニール(ッ)

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	対 照
33	65	48	348	464	0
32	191	46	232	522	0
58	63	36	348	406	0

- 8/9 (1) 20円Sアイスクリーム 紙カップ
 (2) 10円Sアイスクリーム 紙カップ
 (3) 10円Sアイススティック 紙
 (4) 10円Sアイスモナカ 油紙(下請け)

(1)	(2)	(3)	(4)	対 照
0	0	0	6	0
0	0	0	18	0
0	0	0	40	0

8/18 R ----- 実験失敗(おそらく上皿天びんがおかしかったのだらう。)

8/10 Me ---- 実験成功したが、データ喪失。

- 8/27 (1) 10円Gアイスクリーム 紙カップ
 (2) 10円Gシャーベット 紙カップ

(3) 10円Gステック (バニラ) アルミ箔

(4) 10円Gバナナ型アイスステック ビニール(下請け)

(5) 10円Gアイス饅頭 ビニール(下請け)

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	対 照
3	0	0	63	670	0
0	0	0	46	685	0
0	0	0	57	704	0

以上より、S社自身、G社自身が作っているのを食べるとよい。紙包みよりビニール、それよりもアルミ箔に包んであるものの方が安全、大体カップに入っているものは社自身が作ったものであるから安全であるが、その中でも大腸菌の出ていなかったS、Gが無難だろう。

味、舌ざわり

S……………一番よく、液状にしても液がこかった。

Me.G.Mo…舌ざわりはSより落ちるが、大体3社ともいいようである。

R……………わりと豪華そうに聞え、又衛生的だと思っていられっしゃる方が多そうだが、さにあらず全然悪い。香料はまあいいとして、溶かしてみた時の液の薄さ、お金を払うのなら他の四つのうちどこかに払った方がまし。

〔 デスオキシコレート培地は二ヶ月おくと大体駄目になってしまう。この二ヶ月以上おいたもので実験にRを培養してみたが、カップ入りでも相当数、大腸菌が出ました。〕

以下「暮らしの手帖」より

同じ10円でも紙袋が一番悪い。

紙袋入り 122ヶ中 51ヶ (4割)

紙袋入り……………アイスクリームを袋の中に入れてだけで、口には封も何もしていない。中身が半分出かかっているのや、ひどいものになると全部出ているのがある。122ヶ中約51ヶの割で、大腸菌が含まれている。

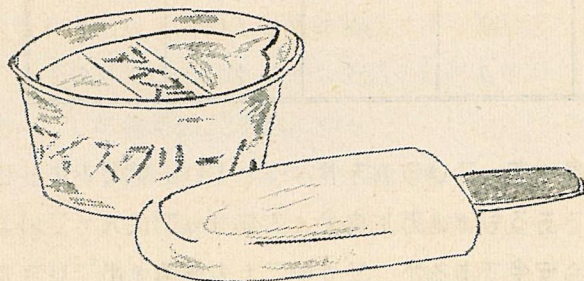
↓
ビニール

↓
アルミ箔

ジュースを凍らせたサラサラしたものより、ねっとりとしたクリーム状のものに大腸菌等の細菌が多くついている。

クリーム状 258ヶ中 78ヶ (3割)

ジュースを凍らせたもの及びシャーベット 84ヶ中 0ヶ



(私達がしたのは、シャーベットがよくなかった。)

使用している材料

白っぽい色をしたものより、あずきを使用しているもの、あずき色をしたもの、特に饅頭式が危険。

あずきを使用したもの 68ヶ中 27ヶ (4割)

あずきを使用していないもの 10ヶ中 2ヶ (2割)

饅頭式のもの 2ヶ中 1ヶ (5割)

○ Me, Mo, Mt, S の4社 (社自身製造) → 3% ~ 11%

下請けで製造 → 成績悪し

下請け (メーカー4社の平均) の平均 → 2割3分

Sの下請け → 6割

○ ジュースを凍らせたもの 着色料皆良

値段が品と比して高すぎる

次に大腸菌について説明します。

大腸菌 (*Escherichia coli* 属名)

- 正腸腸内細菌叢の最も主要な菌
- グラム陰性、周在性のペン毛を有する1~4μmの桿菌
- 好気性、普通の培地によく発育
- ブドウ糖、乳糖を分解、酸とガスを産出す。

……他の病原性腸内細菌との鑑別上重要

○ 大腸菌群の抗原構造 O抗原 → 25

K抗原又はペン毛抗原による抗原分折表が作成され

ている。

- 通常人間及び動物の腸管内に多数存在し無害の寄生菌。
- 時々感染を起すことがある………尿路感染多し
- ぼうこう炎、腎臓炎、胆嚢炎、虫垂炎など、小児 → 急性腸炎を起す。
- ビタミン合成等生理的に必要な機能を果す。

大腸菌の存否………ふん便による感染の有無の指標、水質検査等にしばしば応用される手段。

- 哺乳類の結腸を主な寄生場所とする
- *Bacterium coli commune* が標準種
- 条状の嫌気性、非常に変異に富み通称典型的なもののうちスクロースを使わぬものを *communis* 使うものを *communiior* として区別。
- 野生的なコリーエロゲネス群細菌に近いもの、ラクトース(乳糖)の発酵能力の弱い変異性大腸菌、病原性が強いサルモネラなどに近い大腸菌類似菌、英腸を有し病原性もあり肺炎桿菌に似たもの等が多い。

糖類の発酵は、ヘテロ乳酸発酵のものが多く。

大腸菌族鑑別表

		臭 滴	ブイヨン	ブドウ糖裏天	ラクトース	牛乳	含水炭素の分解		トリガルスキー
		固有運動	インドル形式	ガス形成	酸 発 生	凝固	乳糖	マンニト	遷 藤
大 腸 菌		＋ (弱)	＋	＋	＋ (赤)	＋	＋	＋ (赤)	赤
嫌気性大腸菌		＋ (強)	－	－	－ (青)	＋	－	－ (不変)	青 淡 桃
ゲイトネル腸菌		＋	－	＋	＋ (初赤 後青)	－	－	＋ (赤)	シ
バチルス菌	A	＋	－	＋	＋	－	－	＋ (赤)	シ
	B	＋	－	＋	± (赤)	－	－	＋ (赤)	シ
腸チフス菌		＋	－	－	－ (紫紅)	－	－	＋ (赤)	シ
赤痢菌	異型	－ (ナシ)	－	－	－ (紫赤 後青)	－	－	－ (硬)	シ
	正型	－ (シ)	＋	－	＋ (弱酸)	－	－	＋ (赤)	シ

呼吸と温度の関係を調べる

迷実験

2 年

吉生正人

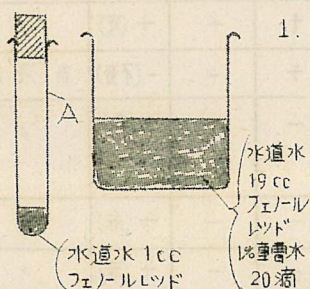
この実験は決して内容的にむづかしいものではなかったのだが、先々で行話し、ついには見事失敗に終るといふ悲劇的な迷実験であった。しかし困る度毎に考えたので、この失敗は全く無意味ではなかったと我一人なぐさめている。どうにもし難い壁に突き当たった為、やり直す術もなかったので反省に停めて仕方なく打切ることにした。

今から述べることは失敗の記録であって、きちんと整理した書き方ではないがお許しを願う。又不必要に思われる事まで述べて他の人に対しても、このように間の抜けた失敗はしないようにと御注意を促したい。とは言っても細々と、すべてのしくじりを言ったのでは限りがないから、これから述べる程度の懺悔でこらえていただきたいと思う。

〔用具・材料〕

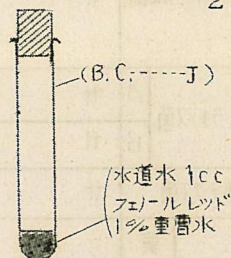
フェノールレッド・1%重曹水・大根の発芽種子・金網・温度計・スポイド・ビーカー 試験管10本(A,B,C,……J)

〔I〕 1. ビーカーに20ccの水道水を取り、これにフェノールレッドの粉末を少量溶

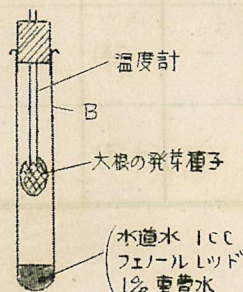


1. かして黄橙色（のつもり）とし、そのうち1ccを試験管Aに保存しておき、次にこの液にスポイドで1%重曹水を20滴たらしめて紅色にしておく。

2. この液を9本の試験管(B,C,D,……,J)に各々1ccずつ分取し、コルクで密栓をしておく。



3. コルク栓に温度計を通し、その先を金網に包んだ大根の発芽種子に触れさせる。種子は緑葉の出ないものを30粒用いる。



4. これを試験管Bに入れて管口に塞ぎ、常温(25°C)において液が黄橙色(試験管Aの液と同じ色)になる(∵試験管Bの液は重曹 NaHCO_3 により、弱アルカリとなっているので、フェノールレッドが働き紅色となっている

のであるが、種子の呼吸による炭酸ガス CO_2 が出てくると、液は次第に酸性に変化する。)までの時間 T_1 を測る。

(失敗1) ここでまだ終りの段階ではないのだが、もう大きな障害に出会った。試験管Aの液の色は試験管Bのそれと確かに初めから異なっていた(試験管Aの液は紅色がかった黄橙色、試験管Bの液は純紅色)のであるが、その色の差がごくわずかである為、Iの4における測定の際、測定時間は極めて不正確なものであった。

[原因・対策]

その原因をよく調べてみると、水道水がアルカリ性であることがわかった。その理由はわからないが、水道水のみを試験管にとって、フェノールレッドを入れれば紅色化することから明らかである。それでは試験管Aの液にすでにフェノールレッドが働いているのであるから、当然両試験管の色の差は少なくなる。ここで水道水を用いるべきでなく、蒸留水を用いるべきであると知った。

[II] 今度ははじめの20ccの水に蒸留水を用いて、Iと全く同様に行なった。

(失敗2)

やや順調に思えたのであるが再び奇妙なことが起った。試験管Bの液は一向に試験管Aの液の色(黄橙色)にならない。少しずつは黄色がかっている様なので気長に腰を据えていると丁度120分も要して、両試験管の液は等しい黄橙色になった。これでは後8本の試験管の液について、温度を変えて調べていたのでは日が暮れてしまう。仕方なく後日に延期することにした。

[原因・対策]

他は蒸留水を用いたが、重曹水を作るのに水道水を用いていた為、Bの液の弱アルカリ性は、いっそう強くなっている。しかし、あの微量な重曹を計って重曹水を作るのは大変であるから、大根の種子をふやして呼吸の生成物 CO_2 をふやせはよいのである。

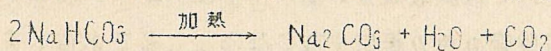
[III] ここで呼吸生物材料は大根の種子が文字通り種切札の為、菜種の花の蕾を用いる。試験管B,C, ..., Jの液が試験管Aの液の色と等しくなるまでの時間 T が、丁度測り易いように蕾の数を調節しようとしても計算でわかるわけでもないから仕方がない。大根の種子30粒で少なすぎたことを考えて、適当に100余個の蕾を用いることにした。失敗2を更に改めて、Iの4まで無事行なうことができ、 T_1 測定の結果は32分でまあ順調であった。

(失敗3)

ここでまたまた奇怪なこと極まりない現象が起った。待てど待てど試験管Cの液は一向に黄色を帯びず、純然たる紅のままである。T₁の32分は過ぎた。変化なし。温度が上がればどのような状態で呼吸の変化があるかわからないが呼吸が盛んになることは間違いないかと予想していたので、これでは話が合わないではないか。そこで試みに湯カスったビーカーから試験管Cを取り出して、水で冷やすと、もう黄橙色になるのである。フェノールレッドの働きが33℃位の高温の下で異常になるなどあるはずない。そこでいろいろと考えてみた。

〔原因・対策〕

そうだと重曹 NaHCO₃ は熱すると次のように分解する。



この反応で、炭酸ナトリウム Na₂CO₃ (強アルカリ性) が出来るので、加熱状態では試験管Cの液はアルカリ性を呈すのだ。これではいくら待ってもきりが無い。それではもっともっと重曹水の濃度を低くすればよいのであるが、いくらに低くすればよいのか、計算でどうにもならない。又、それが分っても薄い重曹水をつくるために、ごく微量の重曹を水に溶かすことは困難である。

ここまで行き詰まれば、どうにもならない。これ以上進めることは不可能となったのである。こうして、すばらしいこの実験はあわただしい最後を遂げた。



文化祭の反省

植物班

2年 興松 安六

待望の文化祭を無事終えて、何だか肩の荷がおりたような心持だが、ここで本年度を反省して、今後への希望なり述べてみたいと思う。

全体として今年は波乱の年であったような気がする。過去一年間、いっしょにやってきた仲間も去ってしまった。どうしてこんな事になったのか僕にもはっきりしない。思うにその遠因というものは、四月に新三年が我々新二年に主動権を移した事ではないかと思う。(これは我々の班のように全体の統制を必要とする班においては特に……)なるべく早く、三年生に受験勉強に専念してもらおうという考えはたしかにいいことだと思う。でも、果してそれでうまく行ったと言えるであろうか。現在の部室内の雰囲気を見ると必ずしもそうとは言えない。この事はもう一度反省する必要があるのではなかろうか。

僕はこれまで苦しみ続けてきた。自分達の活動のまずさに対する悩みと前途への不安を抱きながら。こうして幾人かの仲間が去った。現に僕自身も脱落寸前の時期があった。でもこうして盛大な文化祭を終えるに反んで、いい経験をしたと思う。これは部員みんなが努力してくれたからだと思っている。たとえその成



果は微々たるものであったとしても、僕はそれに達するまでの努力に意義があると思う。これは今度の事を通して部員みんなが身にしみて感じたことではないかと思う。

たしかに生物部は定評のあるとおり、家庭的で和やかな部である。これは大変いいことでとやかくいう必要はない。でも、決して楽しいことばかりではいけないと思う。悩み、苦しみ、そしてそれを皆んなで解決していく場としてこそ、クラスというものの意義があるのではなかろうかと思う。

以下、これから活動面の反省をしてみたいと思う。班としての構造が出来たのが9月上旬(これは少しおそすぎた気がする。)先ず、去年采の藍島の採集が一段落ついたので、研究部面を四つに分けて、それに大体次のように部員を割り当てた。

藍島の採集植物	 全員
歸化植物	 奥松、赤野
薬用植物	 (坂田) 足立 松田
有毒植物	 吉尾

早速、今までの標本の整理と平行して、日曜日に採集を行なって、標本の補充をした。これは僕と吉尾君の奔走に終わった気がする。もう少し皆んな採集に参加してくれてよかったのではないかと思う。又、放課後、小倉図書館まで足を運んで内容の充実に努めた。皆んな良くやってくれたせいか、去年みたいにおそくまで居残りする事なく、スムーズにいった。かくして迎えた文化祭、一日中説明に立ちずくしだったが、他校の生物部員の到来もあってなかなかよかった。(奥松)

プランクトン班

1年 鬼頭政行

上級生の指導で高校入学最初の文化祭を経験したことは、本当に有意義な事だったと思う。

さて、準備期間中のことを考えてみよう。

藍島調査時代、先輩から「今から文化祭の準備をしておけ」と、いわれたが、その時は別に気にもとめずにいた。調査旅行が済んで整理期間に移って後、漸く文化祭の準備ということが皆の目的となった。それからというものは顕微鏡写真の撮影、プランクトンのスケッチ等毎日てんてこまいの忙しさであった。この頑張り文化祭を成功させたといっても過言ではないだろう。文化祭前日になって最終的に作品の展示をしたり、お客さんに説明する練習をした、皆真剣になって一生懸命やっていた。文化祭の朝、僕達は実際のプランクトンを見て貰うためにその標本を採りにいった。それを顕微鏡に装置して、いよいよ準備はすべて整った。これまでは苦勞の連続であったがその成果がこれから現われるのだと思うと胸がワクワクしてきた。やがて一般客がぞろぞろと入ってきた。その人達に説明をしようと思うのが、どうも気恥かしくてうまく出来ない。勇気をふるって説明にとりかかった。つまりながら懸命に説明した。どうやらうまく終って次の人に説明した。そのうちに慣れちゃって、冗談なども交

えながら説明できるようになった。何事も経験だと思う。しかし突飛な質問をされてまでついた時もあった。その時は適当にごまかしておいた。女生徒には皆争って説明した。僕がその回数が最も多いようであった。べつに自慢しているわけではないけれど……。こうして2日間の日程もまたたく間に過ぎてしまった。済んでから気がついたことを述べてみると、

一、本校生徒の関心が低かったこと

一、地図の配置方法などに批判があったこと

一、我々の説明がよく理解出来ないような人がいたこと

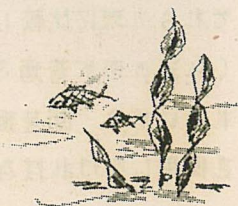
等、まだまだ改善し、勉強しなければならぬ處が少なからず発見された。それをするのが我々に残された義務だと思う。今年入って来る一年と共に、その義務を果し、更に一層研究することがスランクトン班、ひいては生物部発展の為になるであらうと僕は確信する。ある一生徒の話の中に「今年の文化祭では、生物部が最も充実していた」という言葉を聞いたことを報告して最後にしようと思う。（鬼頭）

海藻班

1年 其木茂則

中学とは違って規模や内容が全然異り、とてもたのしかった。僕は文化祭の間、ずっと海藻の説明ばかりしてきて気付いたことは、第一に父兄の方達に説明を熱心に聞いてくださる方が多かったことだ。ある方などは「ナミノハナ」と「テングサ」を指して、「よく似ているがどこが違うのか」と専門的なことを聞かれたのにはびっくりした。第二に学生連の一部には海藻の名前を手帳に写している人や、藍鳥り場所、潮の流れなどをくわしく聞く人などがいたが、ほとんどの学生は海藻には興味がないらしく素通りしてしまうものが多かった事だ。

以上のことが特に気付いたことだが自分自身反省してみると海藻の説明役として、あまりにも知識がなさすぎたと思う。だから二年の文化祭には説明が充分にできるよう知識を豊富にしておくべきだと思う。又、海藻にもっと注意を引かせるように顕微鏡をおくとか、写真をはるとか、もっと工夫をしようと思う。



園芸班

1年 松田 順子

高校の文化祭は私にとって初めての経験であったが色々有益な事を経験することができ、まずこの事を部の皆に感謝したいと思う。

ところで、園芸班の昨年の反省に来年はサボテン中心にやり、できるだけ数多く集めて属ごとに分類し、又種子発芽をやりたいという意のことが書かれていたが、結果は別として目的だけは一応果せたと思う。陳列されたサボテンの数も多く、それぞれ属ごとに分類され、名前も明記してあった。しかし一般の人の知識が低く、一緒に陳列してあった他の多肉の植物とサボテンを混同させている人も多かったようだ。この区別を理解してもらうのにはたいへん骨が折れた。もしまたサボテンをやる機会があれば、正確で且つ平易な分類表を掲示しておくべきだと思う。次に翠香冠の実生実験の方であるが、これは気温の急変などで諦めかけていたものが50粒中5粒ほど発芽し、そのおかげで観察ノートや鉢が未熟ながらも展示できたのである。が、残念なことに、場所が悪かったので目立たなかった為か説明しなければ気づいてくれない人が多かったようだ。折角発芽したのにと悔やまれるが新しい試みとしては成功であったと思う。ノートの中には読んでくれている人があったようだ。

今年も過去二年間と同様に陳列されたサボテンの一部は外部の人のものであった。より多くのサボテンをと思えば仕方ないことかもしれないが、「これらのサボテンは全部学校で育てているのですか。」との質問に「それぞれ部員が持ち寄ったものです」と答えたのには少し気が引けた。

以上が大体今年の文化祭の反省であるが、最後に会場の事について少し書いてみたいと思う。私達園芸班は他の班に比較して、その何分の一かの少ない人数でありながら、会場は他の班と同じにいやそれ以上に広く与えられていた。植物やフランクトンなど狭い部分をより有効にと色々工夫しているのに、私達の会場はそれらの班に比較して気の毒な位ゆったりとしていた。

(私達の班が普通であって他の班が狭すぎるのかもしれないが) 園芸班の特徴や文化祭の主旨から考えても、園芸は必ずしも室内の会場を使用しなければならないのだろうか。文化祭が日頃の成果の発表の場であるならば



何もサボテンの陳列ばかりが能ではないと思う。そこで私は一ツ提案したい。というのはハト小屋のある中庭の事であるが、来年はここを園芸班の会場にしてはという事である。そうすれば他の班の窮屈さも知らぐであらうし、園芸のムードにもよりびたりしていると思う。手を泥だらけにし、汗を流して植えた花々を父兄や他校の人に見てもらふことも嬉しいことではないだろうか。

何にしても少数の班である故、来年も皆の班を越えた協力をお願いしたい。

昆虫班

1年 安井玄治

今年はぼくにとって最初の文化祭であつたので以前にくらべて、よいか悪いかは、わからないが人の話では、なかなか好評であつたらしい。昆虫班で最も人気のあつたものは、なんといっても昆虫標本であらう。これは多くの日数を費しただけあつて、申し分のないものであつたと思う。次によかつたものに、保護色の昆虫を展示したことが挙げられる。この展示によつて一般の人は、昆虫がいかにして身を守るかということがわかつたのではないかと思う。あまり人気がなかつたと言うか、目だたなかつたものに、昆虫の統計表と桌描画がある。前者は昆虫採集をしている人たちにはよいかもしれないが、一般の生徒の人たちには見てもおもしろくないし、なんの興味もわかないと思う。後者の方は、これを書くのに多くの時間を費したにもかかわらず、他の物に圧倒されたせいか、あまりかんばしなかつた。

全体的に見て、机の上に置いたものは、かなりみんなが見ているようだけれど、上の方に貼った写真や統計表などは比較的見る人が少なかつたのではないかと思う。

次の文化祭までにやっておかなければならないことは、昆虫の名を覚えることと、昆虫についての知識をもつと身に付けることだ。人に聞かれて答えることができないというようではいけないのであつて、せひともこの2つのことを、早く身につけたいと思う。

これからの文化祭は、悪かつたところをその都度、改良又は考慮して、次の文化祭をよりよいものにしていかなければならないと思う。



自由投稿

植物後記

3 年

佐藤 幹雄

今、学園を去るにあたって色々な思い出が胸の中を去来している。そこで、三年間この生物部において、採集し続けた植物の感想を述べてみようと思って、ここに筆を吐いてみた。

山や野を歩いていて、草や花が目につかぬことはないし、大自然の中にこじんまりと咲いている花を見つけて、可憐だなあとか、本当に美しいなあと思わぬことはなかった。三年間、植物を採集してきたが、この花の分布がどうの、この花は珍しいということよりも、野に咲いている美しい花、また未知の花に対する憧憬の方が大きかった。だからここでも僕の特に好きだった草本のそれも花の咲く植物について述べてみたいと思う。

生物の学究として僕の抱った態度は邪道だったかもしれないが、「美しいものを美しい」と感じる。これが自然の摂理に最も適しているのではないかと思う。およそ、この世の中にはどの位花の咲く植物があるのか、見当もつかない。中には肉眼では見えない程のものもあるだろうし、中には人間の何倍もある様な大きな花もあるかもしれない。僕が生まれて以来見た草花はこのいくらか分の一であろう。でも僕は自然の美しさの一つに接することができたと思い満足している。凡そ、花のもつ美しさは、次の立原道造の詩を詠めば分るのではないかと思う。

ゆふすげびと

かなしみではなかった日のながれる雲の下に

僕はあなたの口にする言葉を覚えた、

それはひとつの花の名であった、

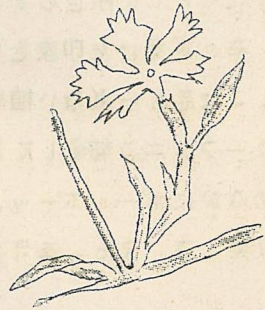
それは黄いろの淡いあはれ花だった

僕はなんにも知ってはいなかった
なにかを知りたくて ラットリしていた
そしてときどき思うのだが一體なにを
だれをまっていたのだろうか

昨日の風に鳴ってゐた 林を透いた青空に
かうばしい さびしい光のまんなかに
あの^{くさむら}叢に咲いていた-----さうしてけふもその花は

思ひなしか悔いのやうに――
しかし僕は走いすぎた若い身空で
あなたを悔いなく去らせたほどに

これを読むと、去っていった女の人を花によってほ
かし、現実にはない、神秘的な美しさを表わそうとして
いるかのようにみえるし、作者の女の人に対する憧れ
をロマンチックに表わそうとしているかのようにもみ
える。しかしどちらの見方も誤りで、去っていった女
の人を一部に配置することにより、いつでも惹き入れ、
また非常に包容力のある花の持つ愛情へくそれは人間のそれのように能動的に作用す
るものではないか)を表わそうと考えたのではないかと僕は感じた。



僕はうちにいるときや、友達と遊んでいるときや、先生の話を書いているときに、
ふと花の面影が胸の中に浮んでき、ほっえみたくなることがある。野に咲いている花
は風景にとけ込んでいるため、なにげなく見過し、少したった後にああ、美しい花だ
ったなあと思うこともあった。このようになにげなく見すごしていく美しさ、そして
いつでも何かの機会を捕えて胸の中に浮んで来、あゝ懐しいなあと思う美しさ、これ
が真実の美しさだなあと思い、また野に行き、季節の花を見たく思ったことが再三、
再四あった。(試験その他色々なことで果せなかったのは、残念だが)

また花は人の心を楽しませるためにあるもので、生物学的な立場から云々いうのは
二の次ではないかと思う。

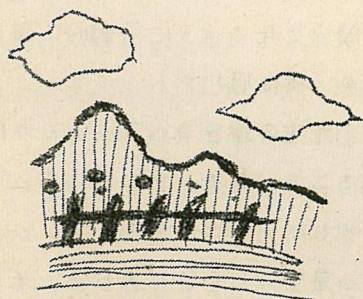
風景の中にとけこんでいる植物それは周りの風景に適応して、それ自身は余り目だ

たないが、風景全体を生かし、また自分もより美しく咲いている様である。時々、僕は花に心の故郷があるのではないかと思うことがある。なぜかと聞かれてもぴったりとする様な答えは思いつかないのだが、野に行き、どの様に知らない花を見つけても、その花を見た瞬間に、その花がいままでずっと心の中で求めていた、美しいもの、憧れていたものではないかと思ひ、いやこれであると断定できる様な親しみを覚える。これ位の所が答えではないかと思う。

花を最も美しく感じた時のことは、今でも胸の中に残っていて、その花の香りが胸をかすかにくすぐっている様である。そこで皆に少しの例を言っておこう。

一年の時の8月15日、木村君や森君と平尾台に行った。真昼の野にはヒオウギく（松葉の意）や、ノヒメユリの紅の花が夏の太陽に照らされ、まわりの青い程においしげっている緑の草原に反射しているかのように見え、夏はこれだなあと割に強い夏を感じた。でも、もう少し径をいっていると急に田んぼがけり、赤とんぼが固まって飛び交い、その下にやさしい桃色のかわらなでしこを見つけたとき、もう初秋が来ていたのだなあと、さつき受けた印象をやさしく秋がおおってくれた。このときの金とんぼの下のかわらなでしこは忘れられない植物だ。

もう一つ、二つ紹介しておこう。三年の時の7月の長期採集旅行のとき、藍島の薄暗闇のなかにポーッポーッと浮んでいたネムの桃色の花の非現実性を感じさせるかのような美しさ、また、三年の8月15日位に九住の尾根で見た、まつむしそうの青い花、



まつむし草が白い霧にまかれ、また強い風に苗をふり、また風のやみ太陽が出たときに笑ったかと思うようにかがやいたとき、ああここまで来たかいいが あったと思ったときのまつむしそうなども、将来忘れることのできない草花だろう。

つぎに植物を今後採集するものへの要望だが、花は一入で楽しむものでない万人のものだと思ふ。

だから君達は二つのものは必ず一つ残すようにしてもらいたいし、色々な機会を捕えては植物のもつ自然な美しさを人々に教えてやって欲しい。拙い文章で言いたいことも余りかけなかったが、もう一つ立原道造の詩を書いておわりにしたい。またこの人の様にロマンチックな目で草や花を見てほしい。

甘たろく感傷的な歌

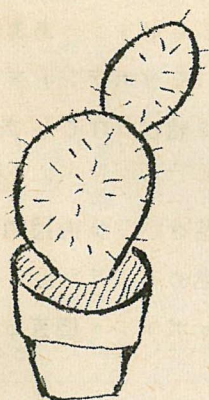
その日は明るい野の花であった
まつむし草 桔梗 ぎぼうしゆ をみなえしと
名を呼びながら摘んでゐた
私達の大きな腕の輪に

またあるときは名を知らない花ばかりの
花束を私はおまへにつくってあげた
それが何かのしるしのように
お前はそれを胸に抱いていた

その日はすぎたあの道はこの道と
この道はあの道と告げる人も、もう
おまへではなくなった！

私の今の悲しみのように叢には
一むらの花もつけない草の葉が
さびしく曇ってせよいである。

それでは皆にこのまづい文章を学園における最後
のものとして、学園に、それから、皆と一緒にみた
花とわかれ、今後は自分一人か、また、今後できる
友人と野や山を歩き、新しい角度から草花を眺め楽
しむつもりです、では、さようなら。 完



サボテンのおはなし

園芸班 赤坂 裕

園芸班は、文化祭で、一昨年、昨年と連続してサボテン
を陳列したにもかかわらず、サボテンに關するものは未だ

何一つ発表していません。それで、ここでサボテンの大事に触れてみるのも意義あると思います。しかし、栽培上のテクニックなどにまで介入すると、膨大なものになりますので、興味深く、サボテンブームの当世で、知っておいた方がよからうと思われる程度まで、主にサボテンとはどんな植物かということに關して述べてみたいと思います。

多肉植物とは、その名のとおりに茎や葉が肥って厚くなり、水分を沢山含んで乾燥に堪えることができるようになった植物のことです。それなりサボテンも凡々しているから多肉植物だろうと考えるのが当然ですが、園芸では、サボテンは多肉植物に含まれるのではなく、サボテンを除いた多肉な植物が多肉植物だとしています。これは、サボテン科の植物が多くて、サボテン全部を合わせると、他の多肉植物より多いくらいになりますので、便宜的にそういう分類がされているのです。このように園芸で使われる多肉植物という言葉は不合理で、従ってあいまいになります。つまりサボテンでなく、初めに述べた多肉植物の定義的な内容にあっているから、当然多肉植物だと思われる植物がそうでなかったり、あるいはその反対の場合とかに時々遭遇することがあるのです。たとえば、よく知られている草花のマツバボタンはどうでしょう。円柱状のふくよかな葉をもっているのに、これを多肉植物と思うのは自然な無理のない考え方でしょう。しかし、一般に、これは多肉植物とは言われません。またするどい剣をもっているユーホルビア科の花キリンという植物には普通の樹木となんらの相異もない葉があるにもかかわらず、多肉植物とされています。ある人に言わせると、多肉植物とはサボテンとどこか似た感じがして、しかもサボテンと同様な方法で栽培し、観賞できる植物だそうです。無責任時代にふさわしい、あいまいな言い分です。

次にサボテンや多肉植物と同じほどよく使われていて、しかもそれらと混同されがちなシャボテンという述語を関連づけて述べてみましょう。「シャボテン、ああ判のある変な植物のことだな、シャボテンなんてしゃれた発音しないでサボテンと言ってしまうばよいのに」と、すぐシャボテンをサボテンにイコールで結びつけてしまう人もあると思います。しかし、これは誤った考え方です。

シャボテンは近年出現した述語です。そして、サボテンと園芸という多肉植物とを合わせて言う時に使われます。合理的にサボテンを多肉植物に含めてしまうと、この述語は、多肉植物と同じ同じ内容をもつことになりますが、シャボテンも園芸上の述語ですから、前者の内容をとるべきです。

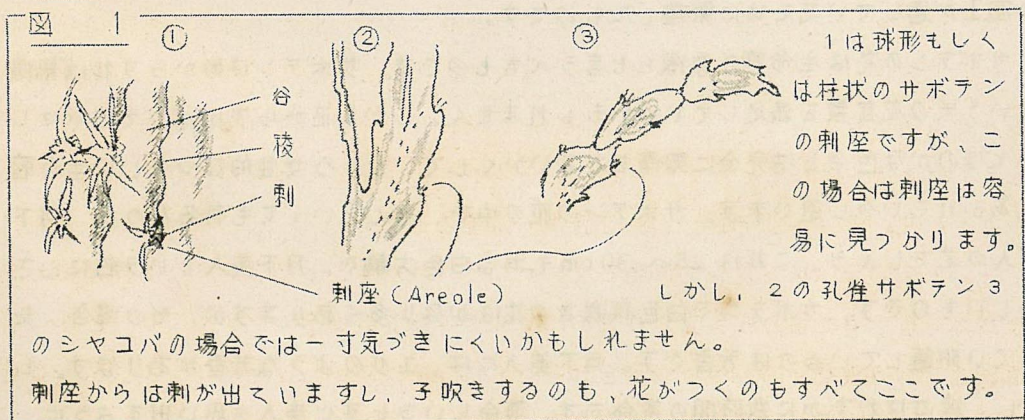
多肉植物、サボテン、シャボテンなどといった述語について述べましたが、ここでサボテンとはどういう植物かという本題に入ります。

サボテンは植物分類学上、シュウカイドウ科とジンチョウゲ科の間に位置しています。似つかわしくないと思うかもしれませんが、サボテンの祖先とされている木の葉サボテン（^{ハシ}キリンなど）が広い葉をもつ落葉灌木であることからすれば、ある程度、納得がいくでしょう。

サボテンには外観上すぐ見分けのつく二つの種類があります。一つは勇壮な刺で武装したいかめしいもので、他は、コング状の、シャコ葉とか孔雀サボテンとかいわれている平らなサボテンです。この外観上の顕著な相異は、主にサボテンの存在する地域の気候上の特性から生まれたものです。つまり、前者は砂漠地方に進出したサボテンで、残酷までに苛烈な気候に適応した究極の結果が、あのエキゾチックな姿なのです。一方後者は密林の中で、雨と湿度と高温とに順応したのです。一見全く違った植物に見えるにもかかわらず、この二つが同一のサボテン科に属することは、次の各点で一致することから事実です。

1. 双子葉植物である。
2. 多年性植物である。
3. 刺座（Areole）を持つ。
4. 下位子房である。
5. 萼、花弁、雄蕊ともに多数ある。
6. 果実は一室で、漿果である。

これらが上記の二者を結びつけたことは、言いかえると、サボテン科の植物の特徴だということになります。したがって説明する価値があると思われますので、少し詳し



く述べてみましょう。

1. は昨年の文化祭で翠香の発芽を試みたとき、発芽した当初に二枚の子葉をもっていたことから明らかです。
2. は一番短命のオープンチャ（ウチワ形をしたサボテン）でも二十年以上、最長年の弁慶柱（面部彫で有名）に至っては、千年以上の寿命をもつことからうなずけます。
3. はサボテンの特徴としては特に重要なものです。図1（前頁参照）のように、これは普通稜上にありますが、マミラリア属ではイボの頂上とイボ腋とにあります。
（マミラリア属は、サボテン科では最も多くの種類をもっています。乳房状の突起のあるサボテンは、大概これに属します。マミラリアはラテン語で乳房という意味だそうですが、普通のサボテンの稜に当たる所が突起になったのです。） 図1 参照
4. の下位子房という述語は、生物の教科書・P.40の図によって理解して下さい。
6. は松霞で説明しましょう。松霞はマミラリア属の、ごくありふれた、子吹きしやすい、しかも丈夫なサボテンです。この果実は赤色で、花が落ちた後に残っています。これを指でつぶすと水が沢山でてくることから、漿果だとわかります。また、花盛丸の果実は乾燥して乾果のようですが、これは、成熟期に乾燥してそう見えるだけなのだそうです。

サボテンを外観上の相異から、二つに分類しましたが、植物学上では、サボテン科は、木の葉サボテン亜科、ウチワサボテン亜科、柱サボテン亜科の三つに分類されます。よく見かける樽形をしたものは柱サボテン亜科に属します。

以上、サボテン科の特徴について述べてきました。

サボテンの原産地は南北西米大陸です。現在、地中海やアフリカでも野生のサボテンが発見されますが、これらは遠い昔に渡り鳥によって種子を運ばれ、たまたま気候や風土が適していたために繁殖したものです。

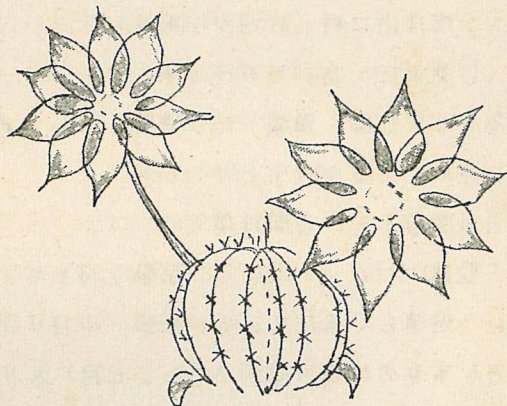
サボテンの花は生命感の象徴とも言えるべきものです。サボテンは形からすれば熱情というその花言葉を満しているかもしれませんが、しかし花からすれば、その水々しさとほのかな色合とは完全に熱情をおおいかくして、むしろ女性的なやさしい生命感にあふれていると思います。サボテンの花の中で、なんといっても有名なのは、月下美人の花でしょう。これは25～30cmもある白色大輪で、月下美人という名にふさわしいものです。サボテンで白色夜咲きの花はかなり多くありますが、その場合、たいてい附随しているのは芳香です。月下美人には、ユリのような芳香があります。しかし、彼女はわずかに数時間の寿命です。薄命というとすぐ美人を思い出すように、

このことが、月下美人の花を一層美しいと思わせるのかもしれませんが。

以上でサボテンとは、どんな植物かということについて述べ終りましたが、ここで僕が栽培した範囲で、特に花の美しいと思われるサボテンを二・三あげてみます。

A) 長盛丸・短毛丸(の花)

いずれも白色夜咲きで芳香をもっています。花の径は11~12cmほどで、15cm程度の花筒の先端にラッパ状に開きます。晩春の夕方から開きはじめる夜中の10時頃から満開となり、明け方には、はやくもおとろえはじめ、その日の午後になると、しぼんでしまいます。元気のよい時には一株から多数一度に開き、花筒ののびの方向とあいまって、配置の面からの美感をかもし出します。



B) 青王丸(の花)

黄色昼咲きで芳香はもちません。花の径は8cmほどです。花筒は長盛丸や短毛丸のような長いものではなく、せいぜい4~5cmです。

午前中10時頃から、午後3時頃までが満開で夕方にはとじ、次の日の明け方になると、だんだんふくらんできます。つまり昼咲きで、このことを4~5日ほど繰り返します。これはサボテンでは長い方です。花期は晩春です。

C) 雪光(の花)

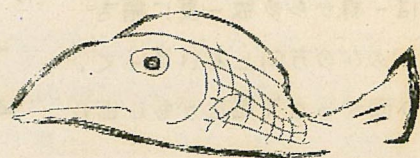
濃い赤色で、芳香はありません。一週間以上も昼夜を問わず開きっぱなしです。径は4cmほどで、小さく、それ自体はさほど美しくありませんが、肌の純白にその紅がマッチした時、非常に美しいものです。知らぬ間にフレームの中で開いていることがあります。そんな場合、一瞬鮮血を感じます。

僕の生物部生活

1年 河原春彦

僕達が入学して初めて体育館に集合したとき、各々の部の紹介があった。その時は何も気にとめなかったが、偶然教室に戻る時に生物部の部長の前を通り過ぎようとし

た時、誘いかけられたので入ってしまった。僕は入部する時、中学時代に生物を習ったことの5分の1ぐらいしか覚えていなかったのが非常に不安がついて迷ってしまったが、べつに入る部がなかったのに入ってしまった。入部して初めの集合の時に僕達一年生は紹介されましたが、対座している上級生がみんな偉いみたいな感じがしてならなかったが、今では僕と同じ一般人であるように、思われだした。さて新入部員のために遠足が行われたが、あいにくとその日は雨のためずぶぬれになりながら平尾台の学校の所まで行った。雨のため、昆虫班や植物班は思ったより収獲が少なくて残念だっただろうと思う。その点プラシクトン班は山に行くのだから関係がないし気楽だった。その日以来、時々部室に来ては、雑談したり植物の苗を植える程度の仕事しかなかった。六月頃夏休みの長期採集旅行には、「藍島に行く」と聞いて、藍島とはどんな所でどんな人が住んでいるのだろうと、いろいろ想像してみたりしていたが、やはり現地に行ってみないとわからないので、その日が来るのが待ち遠しかった。七月に入り、長期採集旅行のための準備で、俄然忙しくなりだし、一年生もうかうかできなくなった。下調べのため何回か藍島に行くので僕も行こうと思っていたのだが、あいにくと用事のため行けなくて残念であった。結局、長期採集旅行の日が藍島に対して初めて足を踏み入れたのであった。三泊四日の藍島生活もまたたく間に過ぎ去ってしまい、今では楽しかった思い出となってしまった。さてこの次の大行事は文化祭であるが、そのために、夜遅くまで、時には夜十時頃まで作業をして帰宅することもしばしばなかったこともなかった。しかしやはりそれだけの熱心さがそうさせたかどうか知らないが、ますますの成功に終わった。昭和三十九年に入る少し前に三年生が卒業するに際して送別会が同窓会館で行なわれた。先生も山岡先生と高原先生が御出席していて大変楽しかった。食事をする時、フランスパンが非常に堅いので食べづらかった。その後で歌などを歌いダンスをしたりした。これまでで、生物部の行事がだいたい終わったのだが、「上級生は下級生に対して気はやさしいこと」「小倉高校を卒業した先輩もわざわざ本校の部室まできて指導してくれること」等が印象に残った。これからまだまだ生物部を進展させるためにいろいろ改善する点もあると思うが、上級生と下級生が一体となってその一つ一つを突き破ろうと思っている。



部 員 住 所 録

部 長 山 岡 誠 先 生 小倉区田町
副部長 真 武 照 子 先 生 小倉区曲本町

3 年	森 聖	小倉区瑞穂町
	佐 藤 幹 雄	若松区本町
	大 西 忠 士	小倉区高峰町
	新 上 義 昭	八幡区枝光
	小 林 徳 二	小倉区尾川町
	川 西 剛 次 郎	門司区竜門
	植 村 俊	小倉区砂原町
	松 永 妙 子	戸畑区小沢見
2 年	岡 本 研 作	小倉区原町
	赤 坂 裕	小倉区城野高坊
	岡 本 清 美	若松区明治町
	坂 田 敬 子	小倉区大門田町
	奥 松 安 六	小倉区千歳町
	田 中 丸 雅 雄	門司区大里新町
	稻 垣 泰 治	小倉区黒原南町
	奥 島 寛 治	小倉区木町鼻
	品 川 一 郎	門司区清見町
	広 瀬 清 一	小倉区東港町
	吉 生 正 人	門司区竜門町
	岩 田 正 彦	門司区大里面上柳
1 年	鬼 頭 政 行	八幡区皇后崎
	山 口 湧 三	小倉区紺屋町
	豊 川 裕 子	小倉区清水町

足立雅子	小倉区大門田町
筒井昭代	小倉区熊谷町
松田順子	小倉区富野
三村和久	小倉区金田町
田原洋一	戸畑区小無田町
川村尚也	小倉区砂津砂津町
河原春彦	八幡区八千代町西
其木茂則	小倉区須賀町
安井玄治	八幡区田町
柿本哲爾	小倉区城野駅前
水上建二郎	小倉区馬借御弓町
酒巻裕三	下関市上山ノ口町
赤野有逸	門司区錦町
伐谷寛	小倉区中津口
関智蔵	小倉区上富野蛸米町
本田彰	八幡区暮ノ町

編集後記

例年どうり部誌ユーカリの発刊をみたことは、我々生物部員一同の大きな喜びとするところであります。二月の初めに計画にヒリかかり、三月の下旬には原稿も一応集まったのですが、研究発表の二三の原稿の集まりが遅れたため発刊はとうとう今日まで延びてしまい、誠にすまなく思っています。内容は二年目に入った藍島調査の成果の発表を主として、研究発表や寄稿などをのせ、かなりバラエティーに富んだものができました。しかし原稿のメ切を急いだため、個々の内容についてはまだ不十分な点もあるようです。

ユーカリもいよいよ十二号を発刊するに至り、生物部もこのユーカリを踏み石として確実に生長を続けています。これからも全員一致協力して、ますます生物部の発展につくそうではありませんか。

K. O 生

部誌 ムーカリ NO.12

発行 1964年3月31日

編集兼
発行 福岡県立小倉高校生物部

代表者 岡本研作

顧問 山岡 誠

印刷 後藤商店

